

## 史料紹介 森本州平日記（九）

東京大学大学院

日本近代政治史ゼミ

### はじめに

本年翻刻する森本州平日記は、一九三一（昭和六）年十月一日から十二月三十一日までの三か月分の日記と、日記帳巻末の補遺、金銭出納帳、住所録等となる。これに先立つ年の「史料紹介 森本州平日記」については、東京大学学術機関リポジトリ（UTokyo Repository）が利用できる（<http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/bulletin/77-15>）のでご覧いただきたい。現在のところ、「森本州平日記（四）」までがここで閲覧できる（二〇一六年二月二八日閲覧）。

この日記の書き手である森本州平（一八八五年～一九七二年）が昭和戦前期にあって当主をつとめた森本家は、長野県松尾村（現飯田市新井）の旧家であり、森本家に伝来した文書の詳細については、飯田市歴史研究所編『飯田下伊那地域史料現況記録調査報告書1 飯田市松尾新井森本家（大森本）文書』（二〇〇八年）、同編『史料で読む

飯田・下伊那の歴史1 松尾大森本の家と周辺の社会』（二〇〇九年）でご覧いただきたい。

本号所載の日記について、その内容の理解のため、比較的詳細な「語句の説明」をつけた。また、解題にかわる論文として執筆された、本号所載の佐々木政文氏による論考「一九三二年長野県会議員選挙の地域社会史的検討」も併せて参照して欲しい。

筆耕には、大学院生の崎島達矢、佐藤大悟、賀申傑、吉田ますみ、アン・ジェイク、石野夏幹、飯島直樹、塚原浩太郎、三村佳緒、石坂桜、上西晴也、谷川みらい、増田由貴があたり、「語句の説明」の調査・執筆には、賀、吉田、アン、石野、飯島、塚原、三村、増田があたり、全体の取り纏めは吉田ますみがおこなった。

日記の翻刻にあたっては、片仮名を平仮名に改め、旧字体を新字体に改め、明らかな誤字は修正し、判読不明文字については□で表記した他、可能な限り原文に忠実に起こした。なお、ごく一部、森本家にかかわる私的な記述、個人に関する評価にかかわる記述などにつき、

〔前略〕、〔後略〕として削除したほか、\*\*\*などにより伏せ字扱いとした。

なお、最後になりましたが、森本州平日記を、東京大学文学部日本史学研究室の学生・院生が自由に読み翻刻することをお許しください、翻刻文について丁寧にご助言を下された、日記原本所有者で現森本家当主の森本信正氏に厚くお礼申し上げます。また、常に惜しみなくお力をお貸しくださった飯田市歴史研究所調査研究員齊藤俊江氏にも厚くお礼申し上げます。

(加藤陽子)

十月一日 木曜

曇晴。朝十時半銀行へ出勤す。帝国海上保険より店員某来行し之と応接し居り、昼食を東精軒にとる。種々保険の話や世間話をして分れたり。午後一時より役場に於て村会開かれ、村長の再選なり。則ち助役議長となり、村長指名者を議長より指名し石原指名せられ、石原は吉川亮夫君を推薦指名する旨を告げて満場一致賛成して終了。助役は其推薦状を持ちて村長を訪問し、之にて村長推薦を終る事となる。庄太郎来訪し、\*\*\*家政整理に付氏乗屋の耳に入り事件紛糾したる旨を告げる。併も前の決定方針によりて猪佐雄の了解を得る事を先決問題とすべし、一度は懇頼して来るべし、次に親戚、組合を連れて頼み入るべし、併して若し聞き入れられずば家資分散迄及ぼすべし、併すれは始めて家政整理出来るものなり、と話し合せたり。猪佐雄の味方としては氏乗屋宣伝隊長となる。彼が吾に對してとれる態度不忠なり。今回の吉川県議に際しても同様なる態度なり。帰宅後釣に行く。

中原当選の礼に来る、不在。

下男久男山本より帰る。宿三原や来訪せり。

予記 銀行にては何事も出来ず。組合の貯金も少なくなりましたは安心せり。

【語句の説明】①石原：石原茂一。松尾村村会議員、産業組合監事。

②吉川亮夫：松尾村村長。九月の県議会議員選挙で再選を果たした。

③猪佐雄：森本猪佐雄。松尾村会議員（一九二九～四六年）をはじめ、新井の耕地委員（一九二四～二五年）、常設土木委員（一九二四～二八年）、松尾入山組合議員（一九三二～三六年）を歴任。

④中原：中原謹司。九月の県議会議員選挙において愛国勤労党から出馬、当選した。

十月二日 金曜

晴。直接銀行へ出勤した。重大なる銀行の時期にあるので放課後吉川、原田を集めて頭取と額を集めて支払制限後の手段に就て話した。研究して如何にして支払制限をなすべきかの手続及上司に對して如何に処置すべきかに付て種々懇談した。頭取は単独で行く事をはばかった。併し予は単独でやつて来る事を主張した。金田が松沢と話して帰行の後、金田の意見も開陳せられた。支払停止は信聯の五万円振込によりて一週間は延引せられた。既に五月末資金難に陥つた銀行は八月末も同様の悲境に置かれたが、種々天祐によつて今日迄命脈をつないだが、安田へ入るべき担保も残り少くなり、他に手段方法がなくなつて支払制限を声明するより外致方がなくなつた。夜十一時迄熟議をこらした。結局経済界の前途も益暗澹であるので支払制限をする事に意を決した。

社会の今日 満州問題世論囂々たり。

【語句の説明】①吉川：百十七銀行取締役の吉川芳太郎。元松尾村村長、現村長の県議亮夫は息子。

②金田：金田岩男。百十七銀行支配人。

③松沢：信用組合飯田支所の松沢数一か。

④安田：安田銀行。一八八〇年に設立され、東北地方を中心に支店網を拡大、一九一二年に株式会社化したのち第三銀行、安田系十一行との合併を重ねた。

十月三日 土曜

晴。組合支所に行つた。中沢村より視察員が来て居た。鋤柄喜十郎の葬式があつて見舞ふた。梨を見舞人に配布した。午前十一時半、銀行へ出勤した。今日は重役会を午後開くので吉川、井村、上柳が出席した。協議事項は本島の話から始めて、頭取が其の俸給百五十三円の内金貳拾をさいて予に加俸せんとした事も出た。頭取は、銀行が支払制限をする重大な期に臨んだので、其の俸給が餘りに高過ぎる事と常務との間に餘り大差があるのを世間的によくない事と思ふて、予に之を転嫁せんとして増俸したので、其の心事極めて陋とすべきである。故に予は之を快よく受けない。平素頭取の心事陋とすべきであり、予が軍人会の副会長として長く勤めたにも拘らず予に対する待遇は極めて冷酷である事を考へて、予は快く之を受けないのである。重役会は支払制限に付て現下の経済状況より止むを得ない事とし、不日支払停止をなすべきものであると決し、其の報告の為に頭取は上京する事とした。重役会も悲痛な会合であつた。予は今日に至る迄の状況を委細報告して伊那電関係、片桐事件、繭の価の下落等、百十七Bの不評の致方なきを話した。

予記 夜十時半に帰宅した。父は\*\*\*家政整理等に頼まれて、上伊那片桐地方へ出張した。青山に依託米の事に付て話した。

【語句の説明】①伊那電関係：伊那電鉄は諏訪湖一周鉄道敷設の認可を鉄道省に提出していたが、鉄道省は自動車運転の増加と経済界不況との理由により、十月一日長野県に対し不免許の通牒を發した。

②片桐事件：一九三〇年一月、片桐享次郎によつて百十七銀行から十九万円相当の担保金が盗まれた事件。六月に懲役刑の判決が下されていた。

③青山：青山金三郎。一九二四年から村産業組合専務理事。一九三四年からは州平に代わつて産業組合長を務める。

④委託米：組合員の委託により組合が販売した米。松尾村の産業組合に販売部が設置され、組合員の委託を受けて米、生糸などの村内生産物を販売した。

十月四日 日曜

雨。金田が犬の子を貰いに來訪するので室内の片付等して午前中を過す。午後に至りて金田來訪し犬を一疋やる。共に自動車にて上飯し、予は聯合事務所に開かれたる産業組合部会に出席す。産業組合講習所県移管に関する件及部落懇談会を催す件に付て協議し、県移管問題は一ケ年の経費を負担して移管を運動する事とし、部落懇談会は下大条辺にて開催する事に決せり（飯田B）。後、奥平中将の満蒙問題講演会若松屋に於て開かれたれとも満員と終了後にて聴くをえず。仙寿楼に於て会食あり。出席して会食に列し奥平中将に面会す。宴終りて中は夜行帰京し予は帰途に付きしか、途中増恵に会い自動車に転乗して、父病氣にて宮沢彌方に静養中なる趣聞き及ひたれば（福沢順一の

注進)、直に増恵と共に片桐行。既に就床中なりしも平沢和一も居合せ、容態を聞くに左程に重態にもなければ次の室に泊る。増恵の話によれば或は平素血圧高ければ重態ならんかと心配せるも左程にもなし。愁眉を開く。

社会の今日 行政整理に付内務省役人(土木)騒ぐ。

【語句の説明】①奥平中将：奥平俊蔵。東京出身、歩兵科、陸士七期、陸大一六期卒。中支那派遣隊司令官、歩兵第二旅団長を歴任。一九二四年一二月一五日中将進級とともに予備役編入。満州事変後、在郷将校から結成された国粋主義団体明倫会の副会長を務めた。

②増恵：森本勝太郎の長女、州平夫人。

③内務省役人(土木)騒ぐ：行財政整理案における国直轄の河川改修事業の地方(府県庁)移管に対して、内務省土木局を中心に各府県の土木技師らも強く反発し、反対運動を展開した。猛反対を受けた安達謙蔵内相は、一〇月三日、直轄事業の地方移管中止を表明した。

④宮沢弼：森本州平の義妹・敏子の夫。

十月五日 月曜

小雨晴。朝、松尾新聞店に至つて電話にて猶太郎へかけて、父の病氣左程の重態にあらず安心せよとかけ、又吉川六郎医師の来診を乞ふ。百十七銀行へも亦かけて、今日は父の病氣に付出勤遅れる旨を告げたり。下男久男来訪して安否を問はれ安心すべき様申送る。文雄来訪したり。正午頃吉川医師来診し容態を聞くに、左程の重態にはなければとも充分注意し安静に保つべき様注意あり。一週間位安静を申込まれたり。依て吉川医師と同伴して帰途に付く。午後三時銀行に出勤す。頭取不在なれば出勤したるなり。監査役会を八日開催すべく決し各監査

役に通知を出す。放課後支払停止問題に付協議せんとせしも、現金の都合何とかがして付く事なれば見合せ、八日を期して方法を講し八日後迄何とかして銀行を保持する事にせり。

勤労党に付予の名を出し批評ある。

社会の今日 外交、内政、共に行つまりなり。

十月六日 火曜

雨。父の病氣左程心配するに及はされとも、家内中心持よろしからず心配す。朝、峯太郎雑魚を持ちて病氣見舞に來り。庄平、鯉を十貫四百匁持ちて売りに來り買入る。之を見て銀行へ出勤す。頭取不在なればつとめて出勤す。既に青山よりも忠告あり、銀行はやめて組合のみに専念すべき様話ありたるも、之をきかさりしを今更なから残念かり居る。岡部徳治郎来訪し、伊沢多喜雄を介して上伊那銀行と合併に付て世話したる話あり。併し此話も掾遠き話にて如何ともすべからざるも、今にして考ふれば銀行か今少し早くより此運動をしたらは現在の如き苦境には立至らざりしなるべしと考へたり。

夜早く帰宅して父の不在を見る。

家族父の病氣を気つかひ一日も早く全治して帰宅せん事を祈る。信濃時事新聞に予の人身攻撃的記事出す。之れ党派心より出てたる事なり。吉川鎮司、粥川進策も前日出てたりと云ふ。

予記 鯉十貫四百、庄平より買。

【語句の説明】①岡部徳治郎：一八八三～一九五九年。高遠町出身。

早稲田大学卒業後、家業を継ぎ製糸・質業・ビール醸造業などを営んだ。その他、高遠製糸組合理事、百十七銀行高遠支店長(一九一八～三三年)、高遠町議會議員などを務めた。

②伊沢多喜雄：伊沢多喜男（一八六九～一九四九年）か。官僚、政治家。長野県出身。伊沢修二の弟。内務省に入り、県知事、警視總監、

台湾総督、東京市長などを歴任。立憲民政党内務官僚の指導者として重きをなし、貴族院における反政友系の有力な指導者の一人でもあった。

③信濃時事新報：民政党系の新聞。一九一五年八月創刊。飯田町に本社を置く。

#### 十月七日 水曜

雨。朝六時八幡発して上片桐行。茄子数百ヶ及川魚を持ちて宮沢へ贈る。十時帰飯して銀行出勤す。聯合事務所に産業組合部会あり。午前中出席す。農家借金整理問題出て県より杉本主事来り。借金整理組合規定等の話ありしも良策なく、集合するものは多けれども机上の空論なりと聴くもの多く、予も亦然るものと聴き流せり。午後監事会あり。監査要項に付て説明ありたり。出席者は多かりしも何の得る所なし。組合より木下六郎、青山専務出席す。午後六時銀行に帰り事務を見る。常に薄水を渉る心地して銀行業務に携はる。伊那社問題に付役員会ありたるも、銀行に出勤したる為欠席す。伊那社の死活問題なれば重大なる岐路にあり。後タルマ屋に吉野と会見せしに、吉野、党費補助に付て上京し勤労党本部に行き補助を乞ひたるも早速出てず、予に寄附を迫る。予も既に百五十円の中原選挙に付て寄付したれば、以上出金は出来すと拒む。勤労党の青年達、予か金を出し方は足りない」と批難するもの多けれども出さず。

予記 夜九時帰宅す。母独り留守居せり。

社会の今日 国際連盟に満洲問題出て国論沸騰す。

#### 十月八日 木曜

雨。銀行へ出勤す。父病気を心配しつ、執務すれば能率減退す。午後一時より風越館に於て愛国勤労党の大会あり。之に出席する筈にて放課後午後五時出席したり。一場の酒間に演舌をして、倫敦条約御批准の節、此の屈辱条約を比〔批〕准せられざる様、去年十月明治神宮に参籠し（同志と）和氣清磨<sup>ハツキキヨモリ</sup>が出現し御大心〔大御心〕をして清明にし奉り、国を誤る条約には是非共批准せられざらん事を祈つた、其の結果にてや、吾勤労党には某宮様が好意を寄せて居られる事、県選挙に当つては若し吾党の候補を落す様な事かあれば南信の勤王心は祖先の顔へ泥するものであると論すべしと教へた。果せる哉、吾地方人士の血には祖先の血が通ふて居る。併して中原は見事に当選した。「諸君やり玉へ」と論した。

【語句の説明】倫敦条約：一九三〇年のロンドン海軍軍縮条約を指す。イギリスの提唱により日英米仏伊五ヶ国がロンドンで軍縮会議を開催し、(i)主力艦建造禁止を五年間延長すること、(ii)英・米・日の補助艦保有率を、全体では一〇・一〇・七、大型巡洋艦では一〇・一〇・六とすることが定められた。かねてから対米七割を主張していた海軍軍令部は政府が海軍の反対を抑えて本条約に調印したことに対して強く反発し、統帥権干犯を主張した。

#### 十月九日 金曜

曇、北風、午後雨。銀行を休みて自動車招きて上片桐へ父の帰宅を迎へ行く。午前九時出発、十時着。父及増恵、彌と共に自動車にて帰宅す。父元氣衰へたるも、帰宅したる安心あるもの、如し。宮沢彌同伴したれば、金二百円を組合より引出し、父分三百円と合して金五

百円を宮沢弼に貸す。彼が無尽より差押をうけ、其の被害中には敏子の荷物もあれば父は之を不憫に思ひ、山林売却を期として支払約束にて証書を差入れしめ金五百円を貸せり。弼は之を資として無尽に話し込み、差押を取下けてもらい荷物は他へ転ずる事とす。

午後雨ふり始め弼は金五百円を懐にして去る。此日銀行は欠勤せり。猶裡の池の水流通せされは新に土管を購はしめて堀り新水路を造らしむ。吉川医師来訪して父を診察してくれたり。五輪様の祭りあり。夜遅れて出席し酒をのみて気分悪し。

社会の今日 錦州を飛行機攻撃、国際連盟騒ぐ。

【語句の説明】①敏子…宮沢敏子。州平の義妹。

②錦州を飛行機攻撃…九月一八日に関東軍が奉天郊外の柳条湖で南満州鉄道を爆破した柳条湖事件の後、若槻内閣は事態の早期收拾・不拡大を意図したが、この方針を不満とする関東軍はこの日、臨時省政府のある錦州を爆撃した。

## 十月十日 土曜

曇。北風。父病気にして人の来訪あるも、銀行の何時支払停止するやも計り難きに付、心は後ろに引かる、心地しつゝも家を出て、銀行へ出勤す。頭取出行せず。午後二時頃に至りて始めて出勤す。父の病気の事を告げて、暫く暇を得て父の病床に侍りて孝養を尽したければ銀行は暇をもらい度しと告げて午後三時帰る。松尾珍臣、席史郎来行し、山本の父も亦大平祝儀の話にて来行し、掛野の娘の話や父の病気の話をなす。父口重くして体ものうし。他に何等の異状なきも安静を怠り勝ちにてよろしからず。常に注意して安静に保たしめたり。上柳喜右衛門、チヅ等来訪せり。

帰途伊那社に役員会あり。出席すれば、伊那社を解散するか今一応やるかの二途中一を選ぶのみの重要な役員会なり。予は会長は如何にすべきかと質せしに、現状伊那社にては誰もうけて会長たるものなし、何とか局面転回せされは如何にもするなけん、木下氏も固辞して受けざるべしと。依て伊那社の存続問題に入り、岡村は予て約せる通り休眠継続説を出し、原、川上は解散説を出せしが、予は岡村説を若し解散するときは今直に再起出来ざるのみならず、法律的に重大なる問題を惹起し由々敷大事となるべしと論じ、維持説を唱へたり。

父病なれば早退す。松沢も来りたり。

松島宇之吉病氣と聞き、卯十三を贈り柿を贈りて見舞。

【語句の説明】①席史郎…松尾虎四郎か。州平の兄弟。竹村家から松尾為誠の養子となる。

②上柳喜右衛門…一八九五年生、長野県出身。名は多賀治。上柳家は酒造業を営み、当主は代々喜右衛門を名乗る（多賀治は一三代目）。長野県が多額納税者。この当時は百十七銀行取締役、蕉梧堂ホテル監査役。

③岡村…岡村勝太郎（一八七一—一九五一年）。一九三〇—三一年に伊那社副会長。また一九二一年から三三年まで竜丘生糸販売組合会長。

## 十月十一日 日曜

曇。冷気増す。吉川医師の処へ訪問し他の医師の診察を乞ふべく話に行きしに、組合支所にて青山、石原、江塚等居合せ金井技手も来訪し居り、大蔵省より検査に来るべき農山漁村低利資金に付打合をなし、来る十三日村役場に於て打合す事を約す。尚金井技手等と蚕品種に付

て談し、金井は養蚕実行組合組織を慫慂せり。父の病氣重からさるも元氣なく口重し。朝来来訪者多く吉川、芳太郎、小島長四郎等来訪せり。吉川医師には佐竹を前沢より差遣してくれると話せり。犬塚利国来訪し、市瀬明の息へ掛野娘をもらい度しとの申込ありたり。組合より八幡行。帰宅して障紙をはり、接客等して日を暮す。種々雑件をなしてまとまりたる仕事なし。組合へ行けは組合に仕事あり、他へ出つれば他に沢山の仕事あり。心地安からず。銀行の仕事に遠〔ざ〕かりたれば、稍安き心地す。苦しき銀行業等をなせは寿命縮まる如き感をなす。

発信 前沢二郎、父の病氣返事。

【語句の説明】江塚：江塚佐三郎。村産業組合第二工場主任。一九二九年から三八年まで産業組合委員。また一九二九年から四六年まで松尾村村会議員。

十月十二日 月曜

曇。冷氣増す。父の病氣見舞の来客あれは銀行を休みて看護につくす。

朝、組合の監査あれは組合へ出向す。県下一切監査あり。石原本所にて監査執行せり。予も之に立会ふ。午前中にて終り、午後役場へ行き助役と農山漁村低利資金借入に付て大蔵省より入江事務官監査の為来村するに付打合を行ふ。帰りて支所にて青山と打合の上、午後三時帰宅す。隣猪佐雄病氣見舞来訪、竹泉堂も亦来る。龍門寺の講ありしも手紙にて欠席の旨申送る。障紙を張る。銀行を欠勤すれは何となく心地伸々したる気分なり。病氣見舞の来客は少し。

本塩助役と打合の結果、大蔵省検査に対しては農村の不況窮状を訴

へて〔以後空欄〕

予記 見舞来客、大平、猪佐雄、竹泉堂。

社会の今日 財政窮乏し国民皆菜色。

【語句の説明】本塩助役：本塩茂次。一九二六年から四六年まで松尾村役場助役を務めた。

十月十三日 火曜

雨。大蔵省から農山漁村低利資金貸付の状況調査の為役場へ来ると云ふので、朝九時に役場へ行つた。併し未た来ないので組合本所へ行く。時に県下組合一切監査が十一日から一週間行はれるので石原監事本所へ行きて貸付証書其他一切に亘りて監査し居れば、之に立会いたる。午後三時、大蔵省より入江昂と云ふ事務官来り招かれて其の検査に立会ふ。右資金は村より組合か転貸をうけ約十万円低利にて借入れたるものなれば、之を大蔵省の目的通りに使用したるものにあらず。組合にて低利のものを借入れ融通せるものに付之れか説明は至難にて、結局事務官の言ふか如く状況を観〔看〕破せられたるも、之れか弁明につとめたり。大蔵省は直接事業執行するものが直接使用する資金であると解して居た。併し此の目的は實際に於て左程簡単には行かぬものである。遂に自動車を組合迄入れて組合本所に来り各帳簿を見た。併して畜産に荒廃桑園改植に使用せられたるものは僅に一万円程度なる事を明にせられた。夜七時迄調へられて閉口した。併して最後に「此金は返金してもらふか否かは帰省した上ならでは判明しないが」と捨せりふを残して気味悪く帰つた。夜八時頃帰宅した。

予記 大蔵省入江事務官の預金部低利資金検査は、微に入り細を穿つたものであつた。父病氣見舞来訪者、正三、孫一、牧内一。

社会の今日 内閣不統一、軍部錦州攻撃。

## 十月十四日 水曜

晴。暖。十月の小春日和なり。午前中、正木と\*\*\*\*と歩いて来訪。三原屋江戸町、仲ノ町宅地及其地上にある建物競落に付予が其の競落人となつて一万六千二百円を出金して買入れ、其纏〔顛〕末として報告のため来訪し、父の病床にて両人が其の報告を聞く。予は其競落に付ては父の命により常に使者として働き居たれば、其内容は定かならぬともよく知り居たり。又父の病の中は此の如き整理事件等は耳に入れしめざる様つとめたり。午後大平豁郎来訪して父の病氣見舞をなせり。午後一時より組合に於て理事会あり。明年度飼育すべき春蚕種に付蚕種家と協定の件につき、各蚕種家を召集して其間に懇談す。理事をして第一に協議せしに、一瓦代金五錢と主張する事とし、之に付て蚕種家と交渉したるに談まとまらずして終る。午後三時より工場を休みて明日の保健署運動会の用意をなす。夜に入りて、本所より大蔵省入江事務官再訪したりとの電話に然らば如何にせしやと問へは、怒つて去つたとの事に、急き村長、助役を電話にて呼び、入江事務官は夕刻組合へ来りたるに役員居らされは大に怒りて去りたりとの事なり。依て了解をうべく、天龍峡ホテルを村長助役と専務と予の四人か訪問し、実情を告げたり。

村長は風間県属より電話にて話ありたれば驚きて予に通知し来り。至急天龍峡ホテルに官吏を訪問し了解を経べしとなし、助役と青山と村長と予と四人直にホテルに至り、入江事務官に会いて内情を告げて村より組合へ転貸し組合は之を以て一般利下げしたる旨を告げたり。始めは入江事務官は松尾村に対して事の行違より怒り居たるも、其怒

もとけて話をなし夜十二時過漸く帰宅。或は村へ引戻すかもしれぬと魯文句あ〔り〕たり。

社会の今日 元老動き出し内憂外患交に至る。

【語句の説明】大平豁郎：百十七銀行頭取。在郷軍人会下伊那郡聯合分会長。

## 十月十五日 木曜

晴。快晴、秋の心地、十月の小春日和なり。右半頭痛し何となく熱あるが如く思はれるに付、午前中藤椅子の上に横はつて新聞を読み、四囲の状況皆否なるをかこつ。併し事多くして予の誠意不足する為ならん。保健署主催の運動会あり。城下運動場にて行はれ工場全部行く朝七時出発なれば予は午後其状況を見るべく上飯す。日暖くして汗を絞る。片倉組の運動会資本もかゝり居り。服装も立派にて（洋装）運動会の成績も優勝なり。午後三時、銀行に出勤して事務を見るに頭取も金田も是非来行してもらい度と云ふ。予は家庭の事情よりして到底其意に満つるか如き事は出来すと思へり。午後六時迄居りて帰宅せり。前沢俊三を訪問して三原屋より買入れたる借家の差配を頼むべく交渉せんとしたが、遂に前沢氏病氣の為訪問せずして終る。

信濃時事新聞に大蔵省農山漁村低資と松尾組合の不法使用と組合長更迭せん等の記事あり。予の身上に関する記事あり。此記事に付ても種々研究考慮すれとも同じく青山か組合長たらんとする野望あるものと察せらる。

予記 保健署主催の運動会は二時間計り見たり。\*\*\*\*屋より使者にて予の洲平を州と訂正の登記書及競落物分割の書類を持ち来る。

発信 岡部徳治郎に上伊那Bとの交渉に付運動費旅費支給すべき由申



送る。

社会の今日 国際連盟も亦動き出す。併し大勢は日支二国間の問題とす。

【語句の説明】片倉組：一八九五年、片倉兼太郎が現在の岡谷市で組織した戦前の代表的な製糸会社。昭和期には片倉コンツェルンと呼ばれるまでに成長した。下伊那地方では鼎村に飯田工場があった。

十月十六日 金曜

晴。関惇逸を頼んで父の診察を乞ふべく電話を以て頼んだ。吉川医師と立会の予定であつたが、遂に立会は吉川医師の都合で出来なかつた。新川端の吉郎平の土地、峯太郎作りの方が水の為に欠潰したので、久を差遣して修繕に手伝はしめた。上飯して牧内一と銀行で嫁談の話をした。大平久男よりは明後年春ならては世話になれんとの申込に對して、それでもよいから是非にと懇望する事に決した。それから其決意の依頼をうけて大平の方へ申込み事となつた。銀行で金田に大平と併へて置いて一身上から常務として日勤の出来難い旨を告げた。父の病氣の為に逃げる様にして出勤するのである。暫く日勤出来ない旨を告げたが、銀行も不安状態にかられて居る折柄苦痛である。午後二時辭して前沢俊三を病床に見舞して三原屋より買受の借屋を差配するの件を頼んだ。引受けてくれたか時代が時代だから屋賃はとれんとの事だった。それから村の小学校へ来た。吉川亮夫に会ふて、銀行合併問題促進の件に付塩川三四郎に頼む事、大島銀行救済の為県より資金を出さしむる事等に就て話した。時に乃木將軍の遺物展覧と玉木中佐の講演があった。それから帰つて関医師の来診を待つた。午後七時来診してくれて、例により綿密なる診察あり。脳溢血にあらずして動脈硬

化症なりと宣せられて家内皆安心した。

〔欄外〕信濃時事に松尾組合長交迭せんの見出て予の攻撃が出た。受信 倉沢量世。中山三郎。

社会の今日 芳沢大使、国際連盟にてガンバル。

【語句の説明】①塩川三四郎：一八七三～一九六五年。長野県出身。

東京帝国大学卒業後、大藏大臣秘書官を経て、オックスフォード大学で政治経済学を学ぶ。帰国後、日本銀行に入り支店長や調査局長、北海道拓殖銀行副頭取などを歴任。一九三一年当時は芸備銀行頭取、広島商工会議所議員。

②玉木中佐：玉木正之（一八七七～一九五四）か。乃木希典の甥。父正誼（希典の弟）は、松下村塾を開き吉田松陰を教育したことで知られる玉木文之進の養子。乃木夫妻殉死の際には、親族を代表して喪主を務めた。砲兵科、陸士九期卒。砲兵中佐まで進む。予備役時代には乃木に関する著作などを多数編集し、啓蒙活動を行った。

十月十七日 土曜

雨。父の看病すべく病床に在り。父下痢して衣及畳を汚す。予は組合へ行くべく用意す。\*\*\*来訪して組合より金策してくれと頼まる。併も彼は既に組合より多くの借金ありて如何ともし難し。依て組合に行きて専務と共に計り、予は彼の為に金二拾円の保証をしてやる事となれり。彼喜んで去る。吉野福一組合へ来訪し、勤労党の今後の処置、中原の動靜、選挙費用弁償善後処置に付て訴へ、機関紙として新聞を作る事に付ても相談あり。印刷業として先づ決意を語り、彼が教員を放棄して印刷屋を始める事を語りたり。猶選挙費用として金百円をかせよと云はれたるも、延期をすゝめて置けり。雨て午後三時帰

宅す。組合の事業に付て青山と打合を行ひ、信濃時事に組合長を引退せしめて青山之に代る事等の記事あり、人心悪化の時、事業は慎重にし何も新期〔規〕なる仕事はせぬ事を申合す。猶横濱行に付ても話したり。吉川医師来診して父に注射を試みたり。予は兩三日来発熱の氣味なれば健康診断を乞ひしに別条なし。血圧も亦一二五あるのみ。

予記 銀行より愈々組合に引退すべき時来る。

受信 倉沢量世。

社会の今日 満州問題国論稍統一す。

【語句の説明】 吉野福一：龍江村の教員。一九三〇年一二月、森本州平や中原謹司らと共に猶興社を設立した。

十月十八日 日曜

晴。朝組合へ出向す。父病氣大によろし。氣稍軽くなりたり。不在中木下祐助、湯沢隆三の兩人来訪す。予は支所より本所に至る。午後五時より上飯し、中原宅を訪問し県議当選を祝したり。此程上溝に於て勤労党結党の準備会ある由を聞きたるも、通知なければ出向せず。

中原氏には、臨時県議は議長、県参事の改選位ならんも其就去〔去就〕を公明にすべき事、一人一党なるも地方本位を以て進む事、他の既成政党と野合すべからざる事等に付予の意見を述べて七時帰宅す。

此日組合にては中信組合より視察団体来訪す。大蔵省入江事務官来組したる調査資料として統計表を市瀬をして作らしめたり。猶此日来訪者は井沢太郎等なり。父の尿の検査の結果、糖分少なき事等関医師より話あり。米八十俵、組合へ委託販売出荷す。内五〇支所、三〇本所なり。

予記 父病氣見舞、湯沢隆三、木下祐助。

十月十九日 月曜

曇。北風。茸出盛る。併し余り多からず。松茸百匁二五、四〇錢、シメシ十錢、十五錢なり。敏子来訪し止宿す。朝九時組合へ行く。青山、江塚と横濱行打合をなす。工場一巡して居たるに宅より下男来り、山本父来訪したるに付帰宅せよとの使者来り。十一時帰宅すれば、山本父は父の病氣見舞として来訪す。次て千田、下田兩人病氣見舞の為来訪す。午後三時半、山本父と同伴して上飯し、蓬平画蘭を喬木写真館に持参して、岩崎清美より依頼ありたるに付写真に付せしむ。三原屋を訪問し借家の状況を問合せしに、江戸町借家は全部建物及大廻りのみにて畳、建具、雑作等は借人持ちなりと聞く。時に正木も居合せて相談中なりし。前沢俊三に差配を委任したる事等話す。次て銀行に立寄りて種々近頃の行務に付問合せをなして帰る。知久町通及広小路通アスファルト舗装にて工事中なり。

本年は秋氣候暖にして、庭前の紅葉未だ染まず。残桑葉青々と繁り居れり。

予記 見舞、竹村大助、千田、下田。

十月二十日 火曜

晴。組合より使者来り行く。実業教員養成所生徒来訪し、組合の内情に付て話す。又下伊那思想問題に付て話せとの事にて、大正十二年頃より起りたる青年マルクス思想の発端より文化会、自由聯盟等につきて話す。鋤柄新一来訪し、彼か銀行よりの借金に付て話ありたるも、銀行の立場を話して午後銀行へ来るべき旨を告げたり。支所より本所行。大蔵省預金部に提出すべき預金部より出資金に付て報告を見る。

午後三時上飯、銀行へ出勤せり。銀行も断然欠勤する時は大平病氣に

て引込み如何ともすべからされは、徐々に欠勤する事とす。扱て考ふれば組合も現任期にて終りとなるべく、銀行も明年一月半頃を以て引退する事となるべし。組合の事も心配なるも、銀行の事も同様なり。重きに付くべく組合を重しとなす。敏子滞在す。不在中吉川医師来診ありたり。

関田齒科医にて上右奥歯二本、右下前歯一本抜歯す。

発信 岡部徳治郎。塩川賢三。

社会の今日 経済不安。国難更に迫り来る。

【語句の説明】①実業教員養成所：実業系教員の養成機関。東京帝国大学農学部にて農業教員養成所、東京商科大学にて商業教員養成所、東京工業大学にて工業教員養成所が附属していた。

②文化会：下伊那文化会。鼎村出身の羽生三七が、早稲田大学文化会と山川均に影響を受けて組織した社会主義思想研究団体。一九二二年五月発足。一九二三年一月、LYL (Liberal Youngmens' League) に改組。

③自由聯盟：下伊那自由青年連盟。下伊那文化会が社会主義運動を展開するにあたって、合法外郭組織として一九二二年八月に設立。下伊那郡連合青年団の社会主義化をめざした。一九二四年一〇月一三日に結社解散命令を受けた後、政治研究会下伊那支部にかわる。

十月二十一日 水曜

曇雨。父病氣徐々に快方なれば組合へ行く。午前中支所、午後本所。支所にて松島乙次郎に会い土地登記未了の話あり。本所にては伊那社より高田技術員来訪し、繰糸技術に付て井深と交渉せり。午後三時上飯、銀行へ出勤したるに既に頭取伊那電重役会に出席し不在。金田と

話す。又井村豊太郎来訪し、林虎三の補員として所得税調査員となりたるに付調査委員の話をなす。午後六時帰宅。父入浴せしめ大に快よしと云ふ。敏子来り看病し居る。

爾来銀行業の方多忙を極め居りたるに付読書修養の時なく、稍神経衰弱に陥り居たり。故に人に対して末梢神経の動きあり。又村内の方も吉川の選挙に付中原を支持したる関係上、一般村民の余に対する感情面白からず。組合長としての職に付て迄も彼は云ふもの出て来れり。

此の一期にて組合長も止め、且又銀行の方も止める時期の至るべきか。

役場にて本塩助役と昨日開かれたる借金整理相談にて何か好案出たるや否やをきくに、村に借金の額調査方頼みたりと云ふ。塩沢よりも同様の話を聞く。

予記 本塩助役来訪。

【語句の説明】井深：組合製糸部技術員。

十月二十二日 木曜

晴。組合支所に行く。一般業務を見て後本所に行く。午後三時頃より上飯し、信聯に松沢を訪問し大蔵省より来れる役人の所業に付問合せたり。松沢曰く松尾組合のハランスを縮小する事を要すと。予も之には同感なり。併して後銀行へ出勤す。大平東京より帰行し予に出勤をす、め、頭取の判は常に常務が所持せられたしと云ふ。併も予は頭取自身にて持つべきものなりと答ふ。銀行も危機に在り組合も同様の状態にあり。此の経済難局に処するに如何にすべきか、大に前途面白からず。父の病氣を名として自村へ引込みて組合の進隆を計るより外なしと決心したるも、銀行の方へ引退を申込みは大平青くなり病氣にもなるべければ、致方なく引づられ居る。

＊＊文雄来り、競落家屋の引渡書に付父と交渉す。

予記 来訪。木下喜□治。

社会の今日 臨時県会、民政党の勝利。議長副共同党。

【語句の説明】臨時県会、民政党の勝利：直近選挙で県会の多数派となった民政党は二二日の臨時県会にて正副議長を自派より選出することに成功した。

十月二十三日 木曜

晴。組合に出勤す。支所にて中島勘一來り、五六〇円の借入申込に對して三〇〇を貸す事としたが、是非全額をと迫られて貸付くる事とした。是れは後より考ふれば、信用貸付は全部停止すべきであつた。本所から電話で本所に行。信産より極度減額、信聯より春繭資金申込如何との問合あり、之を頼む事とせり。貸借表を見るに貸付固定して動かす、一層貸借表の切詰をなすの要に迫り居るを見る。終日組合本所に居りしが別に用件もなく、時に架橋中の水神橋を見る。鉄橋の立派なるもの架設工事中なり。本所に終日勤めて組合の将来に付て考ふるに、信用杜絶し財界の危機組合に迫り居るを見す。種々知能を絞りたるも策の今更施すべきなく、只貸付の制限より停止をなすを可とせん。又購買に於ても、全部現金を以てせんより外策なきを見たり。猶脱退に於ては死亡脱退に於ても定款を変更するの要あり。父の病状に就て吉川医と電話にて相談せり。

発信 吉川亮夫。銀行合併の件たのむ。

社会の今日 国際連盟の日支問題再危機にあり。

十月二十四日 土曜

晴。組合支所に於て横浜より歸りたる青山専務に会ふ。併し横浜の状況報告をうけず、予のみ青山不在中の件々につき話せり。上飯して信用組合に前沢俊三氏を訪問し、江戸町屋賃をとり立委任の話をなし依頼せり。銀行へ出勤す。大平頭取中津行にて不在。近來頭取精神衰弱にて頭取としての貫禄を欠き困る。其の旨に付山本父へ手紙出す。銀行別状なく、信聯よりの融通にて其日を送る。仙寿楼に清和会主催にて山陽及其傍系の書展覽会あり。出席して参覽せり。加納清作主催となりて集むる所九点、其傍系七点計りあり。此催は世道人心に影響する処大にして、單なる骨董趣味の会にあらず。酒飲親睦の会にあらずる事を感じ、加納に賛意を表し置けり。文雄来訪し、＊＊屋より江戸町仲の町宅地引継の書類をとる。今日は多忙なる日なりし。組合銀行両者共に經濟難局に遭遇し、思案に余れり。

発信 竹村大助。

社会の今日 国際聯盟日本の要求を容れず。支那に味方す。

【語句の説明】山陽：頼山陽（二七八〇～一八三二年）。江戸時代後期の儒学者・歴史家。主著に『日本外史』。漢詩人としても知られ、『山陽詩抄』を始めとした多くの詩文書画を残した。

十月二十五日 日曜

曇晴。朝信濃民友新聞記者来訪、之を撃退す。次て中島安次郎妻来訪し、父の病氣見舞旁々子供を組合へ使役してもらい度との申込あり。次て小原安之助来訪し、父の病氣見舞旁々銀行務上の件につき種々話を聞く。組合支所に出頭す。夏秋口挽終了にて慰勞茶話会あり。臨席す。併して青山、江塚と組合の信用部の重大問題、即ち不況の結果、

貸は固定し預金は要求時に払出さねばならん時となった事等を報告し等して打合せたり。午後伊那社監事会に出頭す。伊那社の計算及事務に付て監査したるも宜敷からざる点多く、原唯一も来り合議せしも、此の如き監事は早く逃避するに然かず。次て上飯し、\*\*\*にて借屋証の話をなし各借屋を廻りて、今後私の所有となりたれば家賃の払込は前沢俊三氏をして委任せり、猶借家証を出してもらい度由申込みたり。次て\*\*\*に至り、借家証の話と伝馬町阪尻の受判の話をなして帰る。

社会の今日 国民肚を決するの日来る。

【語句の説明】①信濃民友新聞：一九二八年創刊。上伊那郡伊那町に本社を置く。

②口挽：解舒の難易、糸量と多寡、糸質の良否などを試験するため、原料荷口の繭から小量の試料を抽出して繰糸試験を行うこと。

十月二十六日 月曜

雨。朝組合支所にて口挽中の状況を視察して上飯、銀行へ出勤す。頭取欠席したり。信聯との間の交渉多し。前沢氏に電話を以て交渉し、借家賃収納方を依頼せり。帰途再び組合に立寄りたるに、口挽終了し委員に慰労の辞を呈す。奥村商店より秀島某来訪し、共に鳥清に行きて夕食を喫す。龍門寺を訪問したるに既に就眠後なり。組合に現業員会あり出席す。銀行と組合の懸け持ちなれば、大衆新聞にて森本組合長の独断云々の三ダンヌキにて追出運動ある旨報（廿五日新聞）ありたるも之れに耳を傾けず。大衆新聞、勤労党打倒の名の下に予に当り来る。

【語句の説明】大衆新聞：信濃大衆新聞。無産政党系。北原亀二ら政

治研究会下伊那支部の幹部によって一九二四年九月創刊。飯田町に本社を置く。

十月二十七日 火曜

晴。初霜。父病漸く快方に向ひ、例の通り小言始まる。嬉しき事なり。朝、前沢弁護士を訪問す。組合の伊原キノ競売事件（相続者なき為遂に弁護士による）訴訟費支払の為なり。請求額は手数料五〇、事件実費三十三円六〇銭にて之を六〇、三六銭にマケて貰ひたり。次て銀行合併の件につき問合せたるに、信産市瀬頭取も合併にて大体異論なきも時期好転の時としたき望ある由。次て聯事務所に下田を訪問し、作興会映画に付吉村氏を頼む事とし、県へ教化団体聯合会に付出席方申請し置く事、思想史を寄附する事等につきて打合をなす。銀行出勤す。大平に常務として余り永く勤める事は出来ないと言せしに、大平氏は色をなして斥く。大平氏の上京、吉川氏と銀行合併問題に付打合せたり。帰途組合にて青山専務と打合をなし伊賀良館十五週年に青山の出頭する事、松本製糸業者大会欠席の事等を打合せたり。中島安一息を醸造部に使役する事等につきても話せり。不在中、龍門寺和尚、父の病氣見舞来。日支間の問題紛糾し内外共に多事多難なり。予記 満蒙事件は保証（障）占領の事。経済封鎖来るべしと思はる。支那の方外交は上手なり。

発信 塩川賢三、合併の件。

社会の今日 国際連盟十一月十六日迄休む。

【語句の説明】①信産市瀬頭取：信産銀行頭取、市瀬明。

②作興会映画：下伊那国民精神作興会は教化事業として活動映画の巡回を行った。

③教化団体聯合会…内務省の指導の下に教化団体を組織した教化団体聯合会は、一九二八年四月に中央教化団体聯合会へと改組された。

その際、従来個々に加盟していた教化団体は道府県ごとに組織され加盟することになり、長野県では一九二九年九月十一日に県連合会が成立、翌年一月十四日に中央聯合会に加盟。

④思想史…市村威人著『伊那尊王思想史』（下伊那郡国民精神作興会、一九二九年）。州平が専務幹事を務める下伊那国民精神作興会が頒布した。

⑤醸造部…一九二三年四月に設立された松尾信用販賣購買利用組合の利用部（旧生産部）附属部局。長野県初の産業組合事業として味噌醤油の生産、販賣と委託加工を行った。

⑥龍門寺和尚…松尾村龍門寺和尚、大崎丘山。丘山和尚。

十月二十八日 水曜

晴。組合支所より本所行。前沢弁護士立替金を受取り、証文の預証を返送する事として工場一覽、青山専務と事務打合して去る。上飯正午。頭取、銀行合併問題に付上京不在なり。山口英九郎、宮沢弼等來訪。松沢及池田來行し、放課後仙寿樓に伴ひて夕食を喫す。それから帰宅。山口英九郎氏に、上伊那武井氏が合併の意なきも引退の意あるを利用して合併談をしてくれと申込みたり。岡部の合併運動、効（功）を奏せず。却て伊東今朝一を使用したるより悪発展をなし却て合併に禍したる談、金田よりあり。伊藤、桜村等來訪して金田之に面会し悪発展したるに付金田心配せり。彼等に昼食を供し去らしむ。多事多忙なる日なりし。父の病氣快方にて漸次力付つゝあり。\*\*\*は家財の競落をなしたるも山林売れず、困り居る旨話あり。山口福平よ

り電話あり、明日來行する旨話あり、之れ借家人の家賃をまけて貰ひ度運動なるべし。神稲湧川問題出てつゝあり。

発信 多田勇。高等課長榮進祝。

受信 吉野福一。前沢保。

社会の今日 伊那社湧川問題あり。

【語句の説明】①山口英九郎…一八七一年生。長野県出身。当時は武州鉄道社長、蕉梧堂ホテル社長や伊那電気鉄道、百十七銀行などの重役を務めていた。

②神稲…地名、現長野県豊岡村神稲。

③涌川…生糸問屋湧川商店。同商店の倒産により、一九三一年三月から六月まで間の生糸売掛代金中の未収金五万円の債権確保のため、伊那社は横浜地方裁判所に提訴した。一九三三年二月、横浜地裁は会社債務として金四万五千余円、その他延滞損害金の支払義務を認めた。

十月二十九日 木曜

晴霜。組合支所に行き午前中青山、江塚と種々協議せり。村の失業問題より此の冬期を如何に過すべきかに付考へざるべからざる時なりとして、炭焼、砂利フルイ等に付考慮せり。次て上飯出勤す。頭取上京不在。午後監査役会あり上柳、太田両氏來行して監査を行ひ、監査書を作製せり。終りて夕食を行内にて共にせり。吉野來行して中原県議選舉の費用として思想史寄附を申込み、之を承諾したれば其本をとり來り並製四十九部（内聯合事務所分十二）上製三十九部（聯合事務所分一八）を寄附し、吉野俤にて引きされり。タルマ屋に勤労党役員会ありたるも欠席す。銀行にても内憂外患種々來襲し、神經衰弱

となるか如し。合併問題岡部の手より伊藤にバレ問題となる。岡部来行して金田と前〔善〕後策を講ず。

社会の今日 英国労働党大敗、保守党大勝。

【語句の説明】 英国労働党大敗、保守党大勝：第二次ラムゼイ・マクドナルド労働党内閣は世界恐慌およびポンド危機に対応しきれず三年八月に総辞職するも、国王の要請によりマクドナルドが挙国一致内閣を組織した。一〇月の総選挙では挙国派が四七九議席を獲得し、うち保守党が四五四議席を占めた（労働党五二議席）が、マクドナルドを首相とする挙国内閣が維持された。

十月三十日 金曜

晴霜。朝八時半にて上飯。三原屋書院にて宿三原屋を呼び出て、裡の借家の南庭前を各借家人に付て貸せる事とするが御意見如何と問ひしに、現状を見て而して後にしてくれとの事に現状を見る。宿三原屋の意見は云はず。次て近藤、山口、水野の三人を呼びよせ、近藤は十月分に限り金十一円、山口は十二円、水野は十円の家賃とする旨を告げ、他の堀のキワへ道を付ける事、其他に付ては月を越して相談する旨を答へ置けり。次て銀行へ午前十一時出勤し十二時間再び出て、組合に來り役員会に列す。不況対策に付て伊那社の状況等につき報告せり。ツク／＼考ふるに、此の村の経済難局に當つて銀行を捨て、村へ歸りて村の経済を救ふべく一意専念することの使命ならんかと帰途熟々考へて歸る。古史郎、父の病氣を慰問に來り、夕食を喫して去る。組合の年末資金三万円借入の加判をなす。多忙なる日なりし。

予記 あち。丘山和尚。

発信 牧野秋太郎、貸地料此方へ払ふ。前沢俊三。松岡岳重。

受信 松岡岳重。

【語句の説明】 あち：上松あち。州平の妹。

十月三十一日 土曜

晴。組合支所行。次て齒医関田行。未だ抜齒の跡治せず、入歯手術を了せず。次て本所に行く。神榮より電話あり。出荷三井物産売込方話ありたるを以て、財界の情勢益々險悪なるにより六一〇円にて任す。午後一時より村会あり、出席。押沢山伊賀良三区と分割に付報告あり。分割の基礎は草高、戸数にあらすして遠近、部落等を加味したるものなる事を以てしたり。三六〇丁歩の内九〇丁歩を伊賀良に与へたりとの事なり。弁天橋架橋に付、地元寄附負担割、松尾 $\frac{2}{10}$ 、喬木 $\frac{8}{10}$ 等の報告もありたる。午後四時終了し飯田行。銀行にて前沢保に会ふ。保は金鶏学院に遊学したきに付学資の補助を乞ひたるも、彼が朦朧病なる旨を聞き、現状にて修養をすゝめたり。頭取歸行し、東京に於ける合併問題に付運動の経過を聞く。斎藤席五郎氏にも又寛氏にも会いたる旨報告あり。大蔵省にては種々心配し居らるゝも、果して効を何時奏するやも知れずとの事にて、夜七時帰宅せり。父病氣大によろし。宮沢彌、桜井両氏、小西の家の保証人にて市瀬明より訴状をうけ、地代支払方に付支払命令を前沢弁護士より訴状送達をうけたる旨話ありたり。

銀行、組合等財界の大變動により人心悪化し、心配多く顔色憔悴せり。

予記 銀行欠勤す。宿三原屋へ家賃の内12〔を〕十一円に割引し壹円封入返す。前沢俊三氏に家賃の旨話す。

【語句の説明】 ①神榮：神榮生糸株式会社。

②金鶏学院：一九二六年に安岡正篤により設立された私塾、国家主義団体。精神教育に重点を置き、機関紙『金鶏学報』を発行した。

十一月一日 日曜

快晴。小春日和なり。朝、水野来訪して曰く、「目下住居せる借家は三原屋と古来の関係ある為無料にて借り居るものなり、故に今更所有権が移りたりとて家賃の支払に困る」との申込に對して、「それは三原屋對君の関係なり、予は無料にては貸す事出来ず、故に三原屋との間の交渉をなすべし」と告げて去らしむ。次て宿三原屋来訪し、彼の不得要領なる問ある中に、借屋を猶多く借りたき事、三原屋より買ひ（推し付けられたり）たる幅物の所有権の名義を借りたし（断る）、三原屋処を吉川医師に売り度き事の話あり。昼食を喫して去る。午後組合支所へ行けは、市村より保証系に関する督促状来り居る由聞きたれば、本所へ行きて見るに正金銀行より保償系に關して請求状内容証明を以て来り居り。之には一驚を喫したるも、態と平静を以て之を取調へ書類を全部持参したり。後、青山専務本所に伊賀良組合十五週年紀念より歸りて相談し、兎に角出浜して問屋と打合の上方法を講ずる事とせり。

庚申講牛草にて開かれ、御馳走多過ぎて小言を言ふ。

蕉梧堂に秀島を訪問せんとせしも不在。帰宅。

【語句の説明】①保証系・保償系：補償生系。一九三〇年三月、政府は糸価の暴落阻止および安定のため、製糸業者への融資により銀行が損失を受けた場合には政府がその損失を補償する「糸価安定融資補償法」を発動させた。同制度では、問屋が製糸家の代理人として生糸を担保に銀行と借入契約を結び、その担保生糸が「補償生系」、

「補償貸付生糸」などと呼ばれた。この糸価安定策は失敗に終わり、補償生糸は膨大な滞貨となった。

②竹村要人：松尾村会議員（一九二五年～三七年）、松川入山林組合議員（一九二二年～四〇年）。

十一月二日 月曜

快晴。朝、竹村要人来訪し組合支所にて面会す。彼は吉川の県議選挙に關して、予に立場上当選祝賀会をするから金を五十円出せと申込あり、諾す。次て蕉梧堂に秀島を訪問して保償系の件を問ふて、組合としては補償系をかけるは誤なりし由、併し目下の処決定し居られは如何ともし難しとの事にて、其俣になし置くより致方ならんとの事て其場を治め、不安ながらも銀行へ出勤すれば、安田、内藤来訪し、東京の財界愈々惡にして貸付中止し担保も取らざる由話あり。銀行業の命、旦夕に迫りたるを覚ゆ。頭取も心配し居る處へ松沢要蔵来行し苦況を話す。薄氷を踏む心地して銀行に居る。山下□来行し、水野の現住の家を売ってくれと云ふ。断る。不安苦況言語に絶したり。内にては組合の保証系問題あり、外では銀行の資金問題あり。徒に苦慮するのみ。

発信 原唯一

十一月三日 火曜

〔記述なし〕

十一月四日 水曜

組合の用にて横浜行。朝、阿佐谷信陽舎へ着して信也を訪問す。柿



を土産として与ふ。一憩の後、明治神宮参拝すべく信也を伴ひて原宿下車、明治神域に入る。昨日の大祭のため未だ神域清浄ならず。昨日の雑園を思ひ起さしむ。菊の奉納あり。生花もありて之を一覧せり。

見事なるものののみなり。信也と分れて予は横浜に向ふ。神栄を訪問して、保証系の損害負担に付如何にすべきかを問ふ。之に対して、之れは未解決のまゝ、放任せらるゝ問題なり、銀行も単に手続上なしたるのみならんと云ふ（小菅、田代共々）。次て日本生糸に稲田氏を訪問して同様の質問をなし、永峯氏も同様の答なり。次て三井物産に吉田氏を訪問したるも、同じく答へて如何ともし難かるべしとの答あり。次て奥村商店に立寄る。夕食に招かれてカドヤ旅館に納り一泊したり。

【語句の説明】阿佐ヶ谷信陽舎：信陽舎は首都圏に進学する長野県出身の男子学生に宿舎を提供する目的で一九〇六年に創立された。最初は東京の大塚台に位置していたが、一九二七年に当時の杉並区馬橋三丁目（現在の阿佐ヶ谷地域）に移転した。

#### 十一月五日 木曜

雨。横浜かとや旅館より出て、奥村商店を訪問し、店主に面会して保償系の処分に付松尾組合へも正金銀行より督促状来り居れば之を何と処置すべきかに付相談し、処理委員として尽力方を頼み且又将来の方針として出荷を頼まれたり。越六郎氏に同店にて会ふ。午前十一時辞して東京に去る。三越帝展を見る。帝展は其数多くして極彩色の画面のみ。其技進みたりと雖も、気品に欠くる処多く趣味なし。賞鑑するものなく、徒に視神経を刺激するのみ。西洋画の方はロク／＼見すして走り通り、彫刻に於ても牧内、倉沢両氏のを単に一べつしたるのみにて出づ。松阪屋呉服店に入りて土産物を買ひて春台荘に走

らせ、夕食して再び白梅園に移り、中原を訪問し横村、塩原と話して、下田文一奉天支店長に榮転し六日夜行出発と聞きて見送らんとし、一泊する事に決す。

【語句の説明】下田文一：長野県出身の実業家（一八八六～一九五一年）。三井物産に入り、支店長代理、本店業務課長、奉天出張所長などを歴任。後に南洋開拓理事、満州炭鉱常務理事などを務めた。

#### 十一月六日 金曜

雨。白梅園へ泊り、午前十時、中原と陸軍省に秦將軍を訪問する事となり同伴して秦中將を訪問し、伊那より勤労党として猶興社が政党運動をなしたる事を話し、南信濃の一角より日本主義による運動が起つた事を報告し、彼も大に喜び、社会主義や共產主義の非国家的流者と同合せざらん事を勧められたり。次て国本社に予一人のみ太田耕造氏を訪問して、法律問題として予が遺産の相続を受けざる様にするには如何にすべきかを問ひしに、裁判上の判決を受けるより外なしとの答あり。予は彼の正しきに赤面せざるを得ず。又国本社が国家非常の時に於ても依然として前の態度をとり居るやと問ひしに、同じ事なりと答へたり。猶國家の多事多難にして一日も累卵の危より早く救ひ度き事を話し合ひて出づ。太田氏は穩健なる手段を取り居れり。

次に小林仁左（衛）門来訪し、幸面会して太田と三人鼎座して國家の前途憂慮に堪へざる話したり。辞去して下田文一の宅を問ひ、榮転を祝し一日泊りて君を見送らんとし來りたる旨を告げたり。

新橋駅頭に午後九時下田を送り後、加納、中原、横村とビールを飲みて分れたり。新宿発にて帰途につく。

【語句の説明】①秦少將：秦真次（一八七九～一九五〇）。福岡出身、

歩兵科、陸士二期、陸大二期卒。陸軍皇道派の中心人物となる。

② 国本社：新人会に対抗して上杉慎吉、天野辰夫らが結成した興国同志会の一部が平沼騏一郎を迎えて立ち上げた国家主義的団体。

③ 太田耕造：一八八九～一九八一年。弁護士、政治家。国本社で活動し、のちに平沼内閣で内閣書記官長を、鈴木貫太郎内閣で文相をつとめた。

## 十一月七日 土曜

曇。朝八時十三分飯田着、直に銀行出勤す。電車中大平の子息、娘等と共にす。銀行業務閑散にて自己資金を以て辛ふして営業を持続す。聯合事務所を訪ひ、部奈恭一氏に面会す。氏は郡農会技術員の乞により南米殖民の状況を口演すべく来郡したるなり。次て午後帰宅して、飯田鈴男、平沢千代美と結婚し、其の披露宴に招かれて行く事となり祝儀を包みて金田、石川と赤穂行。料亭宮本に宴あり。主に行員連中にて披露宴盛にて舞踊等あり。午後九時終了して帰宅せり。此日諸事多忙を極めたり。帰宅して種々の土産物持ち帰り。子供へは宏に靴下、コム靴を与へたり。炬燵かけ蒲団地等を買来る。柿豊作にて借家裡のものを取り来りて皮をむきつるす。吉川医師来診せり。テラツテンなる薬を関医師の指図にてとりよせ、来着したれば注射する事とせり。

【語句の説明】 部奈恭一：ブラジル拓殖協会総務次長。

## 十一月八日 日曜

快晴。朝、石原が父の病氣見舞にやつて来て坐敷を明けて茶を啖し話した。それから組合へ出勤した。既に奥村かやつて来て居た。三浦

と秀島と技術員小山田を同伴して仲々大勢である。先つ専務と江塚との間に正金の補償糸の処分に付て話があつた。奥村に頼んだ補償糸処理委員会は、右補償糸の処分に付其損害を猶五千万円増して政府に引受て貰ふ様議会の問題とするより外なしと決したとの話あり。それからミドリに行つて連中と予と専務と江塚にて昼食をとり、居残て組合の事業に付て江塚、青山と打合して本所に至り、所内を検して飯田に行き（途中三浦、小山田の車に乗る）池田を訪ひしに田代方にある。来る十日午前八時来診を頼みて帰宅す。此日は多忙ならずと雖も時間ギリツメ仕事出来ず。

発信 水野善次郎、家賃の催促。

## 十一月九日 月曜

曇。朝組合支所に行く。家政整理及身代限り等不況時に際して困窮するもの多し。醸造部田\*郎、其主任として勤め居りしが不行届の点あり。清水鉞を招きて聞く処によれば不正の点もあり。田中句一郎、熊谷平一なども相談の上退職せしむる事とし、其宣告をなす。午後になつて青山と共に上飯田館に於て開かれたる郡部会の組合役職員大会に出席す。不況対策及組合主義の普及徹底を計る方法等講せられたり。終つて原唯一、羽生峯雄と伊那社監事の監査に付て相談したるに、事実と定款と異なる処多く、之が監査簿記載に付ては尚考慮すべき点多く、次会を約して散す。太宰楼に於て守田雅三と謀り、部奈恭一を聘して晚餐を供し、南米ブラジル移民の状況に付て種々珍らしき話を聞く。

組合役職員大会にて、終了に際して北原阿智之助、思想問題を捕へ来りて思想の險悪を、組合の注意を述べたる点、吾意を得たり。

予記 国際連盟、吾国の為に不利なる態度をとり、三国干渉の際以上

に国民緊張すべき時に拘らず、非国民的のもの多し。国の亡ひんとする時は如斯ものか。あゝ。

社会の今日 国聯の我国に対する態度、憂ふべきものなり。

【語句の説明】 北原阿智之助：一八六八—一九四七年。明治昭和期の政治家。長野県出身。長野県議会議員に長く在職し、衆議院議員を二期務める。国民精神作興会長。上郷村長。

## 十一月十日 火曜

晴。池田医師を聘して父の療治をなした。灸は背と腹へ幾十となく据へた。父の病氣も殆んど全快に近いた。何よりも嬉しき近來の快事である。それから銀行へ出勤した。頭取が其祝儀の為に欠勤して居るので止むなく銀行へ出た。銀行も難局である。国も難局である。其日其日を送った。前途の不安と不況の為に薄氷を踏むの感あつた。竹村要人から強制せられて吉川の選挙費用へ五十円寄附する事とした。其内三十円を組合から引出して与へた。

天皇陛下、熊本県下の陸軍大演習御統監に御行幸せられしに、軍艦にて横須賀より九州に渡らせられたり。陸路は御警戒遊はされしならん（行幸御取止の説もありし）。由々しき時節なり。

## 十一月十一日 水曜

晴。組合支所に行つた。焼酎屋に土蔵を建て直すので其建前が朝から行はれた。其現状を見舞ふた。下男を遣はして普請せしめた。組合で平沢源三と云ふ殿岡屋の息が大平火災の保険勧誘に來た。以前に自宅を訪問してくれたが不在であつた。青山と組合の事業に就て打合せした。片倉製糸の煮繭及繰糸を見に行つた。井深を連れて行つた。片

倉は其工場及繰糸共に整然たるものである。工場長の命令か工場の隅々迄行届いて居る。其工程の速度、規率等概とすべき点が多い。近來、製糸部工場の方針がよくないし能率も上らないのは、常に冗員が多い点と威令の行はれん点が多い。之れは井深現業長に一任して、よいと思ふ事を行はせるに限ると思ふ。予の意志も青山を通して余り行はれない点もあると感じた。それから上飯して午後二時過銀行へ出勤した。銀行、組合共に經濟難局に當つて居るので到る処困窮の話のみであつた。銀行では金田より金のつまつた話があり、其の対策は支停をやるより外案はないと云ふ事であつた。

予記 国事多端、内外共に難局迫り人心利を征するに急になり。一人として国民大会を開いて氣勢を揚げるものかないのは悼むへきてある。

## 十一月十二日 木曜

曇。組合支所に行きて小山田氏来組し繰糸方法に付て研究してくれと聞いて、朝九時に出勤す。小山田氏来組し種々意見を聞きたるに、同じく講義をなすの人なりと思ふ。午後六時半より一般女工に対して講話を頼みたり。工場を一覽せしむ。種々の点に付て指導ありたり。予は午後二時上飯出勤し、再び午後六時組合支所に歸りて小山田氏の繰糸上に関する講話を聞く。其の話面白く、比喻を引き身振して二時間半を短かく聞き終る。小山田氏の意見としては左の通り。釜中の整理悪し、点緒数少なし、能率少し、スヒート時代に添はず、繰湯の温高し、上湯を流失す、スクリの持方悪し、小枠の廻転数少し、試験規則の改正、競争を各自の間に起さしむべし等。諸諍比喻を交へて面白く話せり。有益なる講話なり。

十一月十三日 金曜

晴。組合支所に行く。近来、銀行に出勤する事は前途暗澹としても  
のうし。南信新聞社記者来訪して帳面を出せしか、当組合は公告等は  
出さんとはねたり。午前十一時上飯、銀行へ出勤したり。岡島某来行  
したれば、面接して片桐事件の貸付金に関して支払を請求せり。午後  
一時小山田来組したれば第一工場へ来られたしとの事で、第一工場へ  
行く事にして午後一時銀行を辞す。店頭閑散なれば支店検査を十六日  
より開始する事とす。組合にては小山田をして工場を見せしめ、午後  
六時半より工女を集めて小山田の講話を聞かしむ。昨夜と同様の話に  
て興味深し。殊に繰糸技術を比喩を以て話し、道徳を勤勉とに結付け  
て女工をして楽んで精進せしめんとするの点、話上手と云ふべし。予  
は終りに繰糸方法の一転機なる旨を告げ閉会したり。青山、田中兩人  
をして上諏訪に開かれたる県下産業組合大会に出席せしむ。小山田、  
柿を喜び食す。

予記 松平、吉田両大使を国際連盟に特派したり。

【語句の説明】①南信新聞社：政友会系新聞。一九〇二年一月創刊、  
飯田町に本社を置く。州平が重役を務める。

十一月十四日 土曜

雨。組合に出勤す。県庁より和田某、役場の会計検査に來役し其序  
を以て組合に來り。農山村漁村低利資金の調査に來りたれば、貸借対  
照表によりて低利資金は副業奨励費及直接貸付等あり、副業奨励は前  
に凍豆腐、其他副業資金に貸付ありたるものと相殺し、全体の金利を  
引下けたりと報告せり。依て県属は此の方法を最も有利有効なりと認  
めて去る。次て午前十一時頃、青山専務諏訪産業組合大会より歸りて

種々打合を行ひ、製糸部委員会の件其他に付打合せたり。午後二時、  
小学校に於て役場主催、本年入退営兵の歡送迎会あり。組合よりも饒  
別を贈り且其席に列して來賓として一場の演舌を試みたり。後午後三  
時過、銀行に出勤せり。併して頭取祝儀を済ませて出勤したれば、祝  
詞を述べたり。風邪の氣味にて鼻水出で咳之に伴ふ。

前島貫一來り池田愛泥寄附、万象画幅二枚持参。

【語句の説明】①入退営兵：この時期、長野県は第一四師団（宇都  
宮）管区に所属しており、大多数の入営兵は松本の歩兵第五〇連隊  
に、他兵科は宇都宮、高崎、水戸の各部隊に入営した。中には朝鮮  
配置の部隊に配属される者もいた。なお、昭和七年度入営兵中、歩  
兵第五〇連隊には長野県から七一四名（上伊那七〇名、下伊那八五  
名）が入営した。  
②池田愛泥：池田傳之助、南信新聞主筆。  
③前島貫一：南信新聞社支配人。

十一月十五日 日曜

曇。暖なり。年貢米三十俵計り入庫す。七月土用前の天候連日の雨  
天にて、稲株の張よろしからず。分蘖よろしからざりし為（秋日和は  
遅く迄暖にて申分なかりしも）収穫を気つかひしが、相当の米収なり  
し由にて安堵す。養蚕の収益、僅に其糊口を凌ぐのみ。米作の悪けれ  
は愈々人氣悪化も恐れしが、米作相当あらば憂ふる事少し。午前中庫  
前にて年貢の収納につくし、午後組合支所に行く。青山専務と打合せ  
て製糸部委員会及其他に付て打合を行ひ、午後伊那社監事会に出席す  
原唯一、羽生峯雄両氏來り監查事務に付て打合せたり。根本問題とし  
て、伊那社共同出荷の事業と聯合会の予算事業との間に差違あり。吾

は、連合会の事務会計のみを監査するか又は出荷組合分の〔み〕を監査するかに付疑義を生し、此の問題を議すべく役員会を開くべき事を告げて（木下理事立会）、午後五時終了。次の理事会の決定を俟ちて監査簿記入する事とせり。

伊那社を如何にすべきかに付て相談する事とせり。

予記 風邪の気味、咳出てハナ水流出す。

社会の今日 国際連盟と日支間の外交戦、国民の視聴を集む。

#### 十一月十六日 月曜

雨。午前中上飯し、信聯に松沢を訪問したるに不在に付、飯田信用組合に前沢俊三を訪問し、彼が依頼による長江の身分及系統を調査した。結果に付て彼に報し、血統及家柄等につきて調査したるに良好なる旨を告げたり。再び銀行より信聯に松沢を訪問し、産業組合に付て資金の出るや否やを質したるに、自給自足すべき様話ありたれば、中央金庫に対して資金の請求するより外なき事として手続書を得て帰行し、午後組合に帰る。蕉梧堂に小山田を訪問して小山田と同伴して組合支所に来り、午後役員会を開きて凍豆腐組合に豆代金二万二三千円を貸付の件、之に伴ふ資金に付て相談し、製糸部委員会に臨席す。小山田氏より原料繭処理に付て話あり。組合の乾燥設備の悪しき事及其設置に付て委員の反省あり。終つて夜に入りて、製糸部従業員を集めて繰糸方法の改善と努力に付て打合をなして一新紀元を劃する事と話を定めたり。午後十時迄か、つて小山田を顧問として相談し、手をためて邁進する事とせり。

#### 十一月十七日 火曜

晴。組合行。支所にて部会、久保田案内にて飯島直（糸聯書記）来訪し、糸聯の説明をなし出荷を促さる。時に予は直接輸出を慫慂し、将来系統機関を利用する事となるべき旨を告げたり。併して本所に於て工女を集め、繰糸方法改善に付て経済界の不況打解と本組合の使命として一生懸命良い糸を沢山挽くより外方法なしと話したり。併る後上飯、銀行へ出勤したり。放課後に於て銀行重役会を開くべき旨を決し、重役へ通知する事とせり。終つて銀行の将来支停をするより外道なきを語り、悲痛なる運動をなす事とせり。蕉梧堂に小山田を訪問したるに不在に付、礼として金十円と柿を組合より贈りたり。夜支所に帰りて、本所と同様なる糸質改善と工程増進に関する一場の演舌をなして帰る。組合の繰糸改善、第一步を印したるわけなり。午後十時、帰途中島勘一に会へば酔いて曰く、早く銀行を引退せられたしと勧告あり。之れ予の胸に印したり。八幡公館に吉川当選祝賀会竹村要人主催にてありしも出席せず。竹村へ寄附金20円は月末出すと申送る。受信 近藤福平。

#### 十一月十八日 水曜

雨。峯太郎が花を持って父の病床を訪ねてくれた。茶を入れて花を生けて、家庭内で楽しき団欒をした。それから銀行へ出た。薄氷をふむ心地であつた。江戸町貸家の近藤を招いて、此頃敷金を返してくれと話かあつたが之れは各個人と話かあつたのだから他を取らないと云ふて君のも免除するわけには行かない、併し君だけとる気もないから\*\*\*の方から貰ふべしと告げた。又屋賃は一ヶ月十一円とする旨を告げた。又水野を呼んで\*\*\*の関係をたゞした。水野は、\*\*\*へ

話して古木材と二百五十円を貰ふ事には承知してくれたか未だ受取らないと話した。十月分だけは八円にマケてやるから払へと申込んで置いた。他は一ヶ月十円であると申渡した。又他の借家人日比野、鮎沢へは十一円、山口へは十二円たと手紙を出した。

#### 十一月十九日 木曜

晴。上飯して銀行に出勤した。頭取は伊那電会社重役会に出席した。伊那電では、伊原氏が畢生の事業として完成につとめ漸く功なつたの時此財界の不況に陥つたのと、病氣になつて再起の程も不明なので、遂に彼は勇退して後任に興銀から入る事になつたと聞く。伊原氏の胸中察するにあまりある。伊那交通界の恩人伊原氏に対して一掬の同情をさ、ける人もないのはどーした事か。銀行も信聯との関係、中央よりの資金梗塞の結果困難な立場にあるので、困つた事である。一方家庭の方も父の病氣以来銀行を止めよと云はれるし、郷党のものも早く銀行から脚を洗へとす、めてくれる。困難な時に退くのは甚た無責任の様であるが、之も致方はない。午後銀行から組合本所に来て市瀬牛太郎母の葬式に列したか、遅刻した。それから夜迄組合本所に居た。凍豆腐組合の総会が開かれて、平栗等も此不景気には転業するより外ないと云ふて居た。中原の壮行（県会へ）会かダルマ屋で開かれると聞いたか、欠席した。

社会の今日 チ、ハル占領。

【語句の説明】①伊原氏…元伊那電気鉄道専務取締役、伊原五郎兵衛か。

②チ、ハル占領…この日、関東軍が黒竜江省のチチハルを占領。

#### 十一月二十日 金曜

晴。年貢米の収納日であるので、午前中家居して請取つた。松島喜佐雄は昨年未納の米を本年は持参した。併し彼は、年貢米か納める事が出来ない、何とかして長い間に取つてくれと頼まれた。午前中順太郎、多賀治郎の三十俵計り入庫したのみであつた。朝早く政五郎の俸か入営するので下男をして見送らしめた。銀行へ出勤して、午後恵比寿講で牛肉を挽いて行員と酒宴をした。が、不況の折柄、悲壮な宴であつた。予は元気を装ふて此宴に列して少し過して帰宅した。鯖の生二本と蛤を土産に買ふて帰つた。

#### 十一月二十一日 土曜

銀行重役会を開き銀行の支払猶予の件を付議し、悲痛なるシーンを演ず。午前中より頭取は予か合併論を主張するに對して余り賛成せず、以前より屢々建築すれとも本氣となりて其方に力を入れず。頭取上京する事も再三ありしも、身に入れずして終る。

予記 重役会。平田晋策。小栗慶太郎。

#### 十一月二十二日 日曜

快晴。朝六時に起き出て、七時二八分飯田発にて伊那町に行き加藤寛治氏に面会し作興会主催の青年講習会の事を頼むべく市瀬繁に約したので、碌に眠らずに出かけた。伊藤誠一と一所になつて電車で伊那町下車、菅沼支店長に加藤寛治氏の様子を問合せて上伊那農学校に行つた。丁度品評会（農産）が開かれて居て待つて居た。下伊那の者だと云ふで優待して昼食券等をくれた。市瀬も来り会して待つたが、遂に午前中は農学校内を彷徨して待ちボケを食ひ、漸く午後一時になつ

て加藤氏来校し面会した。初対面であるので要領を話したのみで加藤は承諾してくれた。面会僅に五分位で辞して予は帰った。此日八幡社で戦勝の祈願祭があり招かれたが、行く事は出来なかつた。午後三時に伊那社監事会があつて、出席して伊那社の監査係の連中と監事と会して監査報告書を作製した。伊那社を如何にすべきに付ては考へたけれども、県が伊那社に対する方法は酷であつた。勿論伊那社も清水かやつて以来よくない。けれども湧川五万円の損を棒にふれてはよろしくない。

県か五万円を出してやるか、又は近來台頭しつゝある役員負担を解決してやらねはならん。夜、日本生糸の稲田氏の歓迎会か仙寿楼にあつて出席した。

【語句の説明】①加藤寛治：前海軍軍令部長加藤寛治とは別の人物。

あるいは加藤完治（一八八四〜一九六七）か。東京帝国大学農科大学卒業後、水戸の農業訓練所長、山形県立自治講習所長などを経て日本国民高等学校を設立、校長として青少年への農業教育を推進した。満州事変後には、東宮鉄男とともに満蒙開拓青少年義勇軍設立に関与し、満蒙開拓移民を推進した。

②清水：清水謹一（一八六八〜一九六四）。伊那社会長をつとめた（一九三〇年二月〜一九三二年七月）。

十一月二十三日 月曜

晴。午前十時、銀行へ出勤した。家からは組合へ行くと称して、銀行では午後一時から支店長会議を開いて、財界の現状から遂に此始末となり、一時預金者に支払の猶予を求めるより外なきに立至つた旨を告げた。予は他の用事があつて遅れて階上の会議室に臨んだが、寝耳

に水の支店長は奮闘努力して各支店の成績をよくして居たのだから、此の一言を聴いて断腸の思をしたであらう。駒場矢沢の如きは翌朝泣いて起きる事出来なかつたと云ふ事を聞いた。さもあるべきであらふ。彼の心中は尊いものである。支配人とも明日支払停止をすれば如何に成行くてあらふかを考へる時、悲痛であつた。支店長会議は夜迄かゝつた。悲痛なる支店長会議。肚ては悲痛であつたが、面ては新にする事が他日の更生の早き所以である事を述べて、予も今後の支店長の激励をなした。夜十時過帰宅した。翌日の事を考ふれば夜も碌に眠られなかつた。

予記 銀行行。

社会の今日 日支問題愈々紛糾し、陸軍の腰強し。

【語句の説明】駒場矢沢：百十七銀行駒場支店長、矢沢共一か。

十一月二十四日 火曜

曇強風。烈風吹き曇日和なり。今日預金者へ支払の猶予を乞ふ日なり。予は何となく預金者の顔色を見るのが気の毒にて出行出来ず、直に組合に行く。併し何れに行かんかを迷ふ。銀行にも欠勤しては相済まず、組合も此重大機に欠勤するも宜敷からすと思ひ、組合で青山専務に会いて其の百十七銀行支停の話を話したり。青山も大に困り居りたるに付、予は当座預金其他即時払の預金は貸付のあるものに対しては払戻さざる事、定期と雖も期限前の支払を厳禁す、併して預金貸出各人別の表を作らしめ、之によりて大方針を立てんとせり。併も未だ出来ず。青山と電話にて左の通打合せたり。産組、信聯へも資金の来りたる事、其他を話して置きたるも合併進まず。遂に支停をなしたる記事出ず。

十一月二十五日 水曜

快晴。年貢収納日なので朝から大石屋始め年貢引込来り、之を受取る。本年は大暑及其以前雨天のみ続き分ケツ宜敷からず、或は大饑〔飢〕饑もあらんかと憂ふたが、秋日和好適なりし為収穫よく、昨年も平年作以上なりしが、本年も亦同じく平年作以上にて、百姓の年貢持参するもの皆喜ふ。大石の又一に無許可にて鳥小屋を建てたるを責め、後日指図により取毀つ旨を認めしむべく手運せり。午後上飯、銀行へ出勤す。支払停止後何となく肩身狭く飯田の街頭を身をひそめて通る。銀行に行きて見れば極めて平静にして、小池寛氏、伊原の旨をうけて来行し居り、支停に関する意見等を聞く。最もよき顧問なり。午後一時より重役会開かれ、重役としての此対策案を練る。夜八時頃迄重役会ありて後十時帰宅せり。重役会に於ての余の重役私財提供の案は徒に重役を不安に導きたるのみにて、大平始め吉川共に不賛成にて物にならずして終る。併し一般預金者とすれば、重役が何のクメンもせずして預金者の預金のみ支払猶予を乞ふは宜敷からずと思ふは、さもあるべき事なり。

予記 百十七銀行に対す上伊那方面の悪口、熾に上伊那地方新聞に出ず。

【語句の説明】 小池寛…一八八九年生、長野県出身。一九一九年京都帝国大学法科大学政治学科卒業。当時は郡山合同銀行常務取締役。

十一月二十六日 木曜

曇風。朝九時半過銀行に出勤した。町を通ふにも何となく敗者の様な気分かして、下を向いて進んだ。別に不徳義な事はない。俯仰天地には恥ぢないが、併も財界の劣敗者である様な気持かして人に会ふも

何となく心ひかれた。銀行では、考へ出す毎に整理案に付て心付きたる事を記し一ツ一ツ片付けて行く事にした。常務は予の担任であるので其事務には注意した。公債の下落を見越して売却した。午後各銀行を廻礼して、不始末から飛んだ御迷惑をかけてすまなかったと云ふて廻つた。之れは当然頭取のする仕事であつたが。朝、床にある中に上溝の小木曾と云ふ人か来訪して、八幡銀行支店に預金が一八〇〇円あるがどうなるだろうと云ふて心配して訪ねて来た。会い度くはないか、折角の来訪たので会ふてよく説明して聞かしてやつた。又今村政一か来訪して、州平さんに会ひたいと云ふて来た。彼は小作を不払の前提として来たのだ。八幡支店に当座が五〇〇円ある、其れを引当に金を貸してくれと申込まれたが断つた。彼は不信用な男である。細い事は銀行へ行けと云ふた。

予記 伊那社監事の辞表を呈出した。原唯一にも此件を話して了解せしめた。

社会の今日 陸軍の態度はドコ迄も強かつた。戦争中止を聯盟から云はれたか聞かん。

十一月二十七日 金曜

晴。組合支所に立寄りたるに、青山より、農林省より低利資金視察の為来村し居りとの話あり。信聯より資金融通をうくべき可能性ある事を告げたり。釜場仕事六ヶ敷ければ何とか火夫の交迭の話もあり。専務の仕事多過ぎるを以て之を緩和するの要ありと思ふ。醸造部を見て直に上飯、銀行出勤す。毎日出勤遅れ勝ちにて頭取より小言あり。重役吉川氏来行し、私財と云ふか重役が銀行より借り居る金は此際銀行に返戻して預金払出資金とするより外なく、怒気満面に其整



理を主張し、漸く頭取も其氣になりて私債を返す氣になり、上柳へも井村と共に行き、其話をなし返却せしむる事とせり。猶支払方法等につき研究したり。井村、太田穰一氏も来行せり。平野、松下、松沢、原、小西等召会し、三菱の援助をうくるに付百十七Bの重役会に何の私財提供の決心ありやを問はれて帰行し、此の外交には大に彼の顔をつふしたり。予は彼が清算事務に移るべき事を口外したるに對し、大喝戒めたり。銀行の興亡、此一挙にあり。挙行一致して当らざるべからず。

【語句の説明】 太田穰一：百十七銀行重役。

十一月二十八日 土曜

雪積三寸。朝十時頃より雪模様となり、積る事三寸計り。本年の初雪なり。

敏及川路千代、父病氣に付見舞に來り。又耕斎翁金婚式に付祝品持参せり。銀行へ出勤して支払草案を作製せんとせしが、現場多忙を極めたれは出來ず、終日彼是れに忙殺せるのみ。

湯沢來行し松尾小学校長欠員中に付、三石直人を斡旋す。

新聞記者銀行の支払案に付彼是問合せ來る。預金者も極めて沈靜なるも整理案の如何によりては又騒き出すべきも、財界の大勢極悪にして東京コール二銭を唱へ、地方には金を貸すものなく、財界の波瀾重畳にて次に来るものは政治的動搖なり。国を挙げて動搖し不安にかられ、不祥事頻々として惹起せざらん事を祈るも、或は革命に到るなるべし。金等一文にても貸すものなし。佐々木氏に對しても保証債務あれば預金を支払ひ出來すと答へたり。青山に銀行の方多忙なれば暫く出勤出來ずと話し置けり。

【語句の説明】 東京コール二銭：一九三一年一月下旬、市中銀行の資金減少および月末の資金需要量増加によりコール（銀行間短期取引）市場の日歩が二銭以上まで急騰した。

十一月二十九日 日曜

晴。銀行出勤し蕉梧堂に於て重役会を開き、東京より依頼により來飯せる間運吉及小池寛の両氏と面会し、金田、原田、吉川を呼びよせて重役会を開き、預金支払方法に關する協議を行ふ。支払方法は別に最後迄の方法を定めずして、兎に角小口預金と大口に對しては金五十円を支払ふ事とせり。併て別に文書宣傳せす來店せるものに対して支払ふ事とし、期日は十二月十五日頃とせり。始め金田、吉川芳等は全部の支払方法を定めされは預金者の心理を害するものなりとの論なりしも、小池及予は黙して支払をなす事を良策とせんと談し、予の和議法の用意は第一次支払の節は適用せざる事とせり。午後七時迄會議を続行し重役の決心もつきたり。金策に付ては重役が一生懸命奔走する事とせり。依て重役の借金の返済は吉川芳太郎熱心に主張し、之を以てダン／＼ラチあく事となれり。予が決意の表現の余り激しからざる事に付ては注意すべき事にて、且又行員に對して冷酷にてよろしからざる事等注意ありたり。

予記 間運吉氏には始めて面会せり。夜小池歸る。敏來訪中なりしも歸る。宮沢彌來り、年貢米を南倉に入れる話あり。

発信 石原茂一、議場勤。宮沢彌。

【語句の説明】 ①間運吉：一八九四年生、岐阜県出身。一九一九年東京帝大法科独法科卒業後、東京地方裁判所民事部判事などを歴任し一九二九年退職、弁護士になった。

②南倉：松尾村には、島田（松尾）耕地、毛賀耕地の二箇所の郷倉があり、凶年に備えるため、毎年貯穀の更新と備蓄を行っていた。南倉は毛賀の倉のことを指すか。

十一月三十日 月曜

曇晴。床を揚げて一日の仕事に精進するにものうく、何時迄も勇躍して仕事にふみ出するを出来ず。小作米来るので、強いて床より揚つてイヤ／＼其日の仕事に身を投ず。面白くなき事のみなり。困難に勇躍して赴くの勇氣に欠く。午前中小作米六七十俵入庫あり。午後四十俵余ありたるも、午後は上飯す。銀行に出勤するも頭取も亦来らずして、漸〔暫〕く店員の活動し居るを見る。頭取、招かれて飯田町長其他町村長の公金預金者側の面前に行き、重役の私財は知れたものだ、取り付けらるれば直に消耗す云々と述へたる事に付ては、反響する所多く面白くもなし。予は始めより百十七銀行の末路を考へ、何時か資本主義経済組織の破タンを来すものと覚悟し、其の末路を見届けずして逃れんとあせりしも、今更逃避する事も出来ずして居居れり。銀行へ間違吉来行し、法的処置に付質問せり。支店長会議に関し謄写するや否に付金田と議論合はず。

予記 安江天涯来り無心を言はれたるに付、金一円を恵む。

十二月一日火曜

晴。銀行へ出勤す。頭取は常に悲観的にのみ考へ居りて、時々細少論するに足らざる事を彼は言ひて腦中怪まれる様な事を言ふを以て常に心配居れり。然も頭取は黙徳を有するを以て他人より実価以上に買はれ居れり。予は其れに反して、軽く話し無責任の様に常に樂觀説の

み唱へるにより、無責任なりと誤解をうけ易し。

預金者の殺到するもの少く、吾等重役の内容を良解して何とかして復活すべきものなりとの考あるやに想像せらる。平野、北原、原、松沢等打集ひ、復活案に付相談しくれたり。予も頭取の頭の如何を常に心配し、ウマクやつてくれ、はよいかと心配せり。平野の説にて高橋鍊逸氏を動かして三菱系と握手せんとの議は立消へとなる。公金を如何に処理せんかは、銀行更生の岐路である。此件につき頭取は原、平野等と交渉せるも、頭取の外交手腕は覺束なし。若し万一之れかウマク行かなければ、到底一一七Bは最後の肚を決すべきなり。一旦支停したるものは復活覺束なかるべしとの事を挽回せざるべからず。

【語句の説明】高橋鍊逸：実業家。一九二〇―三二年に三菱商事常務取締役を務めた。その後、日清製粉株式会社監督役、富士纖維工業監督役、満州パルプ専務を歴任。

十二月二日 水曜

晴。午前中組合に於て役員会を開き、金繰案に付て相談す。百十七Bの支払停止後、金融益々硬〔梗〕塞して組合も預金の払戻は相次ぎ、凍豆腐資金其他貸付金は請求をうけ、此際支払の方は十三万円、収入の方は中央金庫よりの融資を合せて七万円に過す。貸付は固定して如何ともする能はず。如何にすべきかに付相談せるに、田中句一郎は、凍豆腐資金は村内最も有力なる生産資金にて之れを断たるれば副業全く潰れ村の経済にも大影響をかますべしとの事に、然らば他に金融の途付かされば如何ともし難かるべしと論し、遂に農山漁村低資を最後には引出し借用して之に充つる事としたり。午後支店長会議を開きたれば、銀行より迎への電話頻々たり。午後三時出飯、支店長会議に列

す。併して金田より指示事項に亘りて細部の説明をなし、予は某支店長が熱心の余り涙くましき奮闘を続けたる話を出して、此銀行は一意専心、重役始め皆更生の意気を以て事に当るべければ諸子も其心にて一意専心銀行の一日も早く更生せん事に努力せられたしと告ぐ。

予記 山口氏貸金回収の為上京す。伊原氏にも亦資金回収の話をなす。  
【語句の説明】 田中句一郎：田中荀一郎か。松川入山林組合議員（一九二八～三二年）、産業組合役員（一九二八～三三年）を務める。  
一九三三年、松尾村議員当選。

## 十二月三日 木曜

晴。朝寒く駿台荘に着して少憩の後、午前九時本郷駒込の山口氏邸を訪問す。栗納豆を大平堂より買ひて手土産とす。主人在宿、面会して貸付金の書替を催す。又銀行の支〔払〕猶予後の状況を報告して、重役会の申合により此際重役に貸付金を全部回収して預金者への支払に充当する事となりたれば何分の支払を乞ふ旨を告げたるに、山口氏困つた／＼のみ繰返すのみにて書替も内入もせず。予は、然らば他人行儀となりて書替を請求するか又は時効中断の形式をとるより外なしと攻めよせ、遂に書替だけは承諾せしむ。それから日本工業倶楽部（赤字倶楽部）へ出向して昼食を俱にした。昼食後同様の困つた話の末、遂に書替を承諾せしめて今晚中に届けて貰ふ事としたり。夜に入りて牧野内武人を麻布の寓居に訪問して、予の銀行に於ける債務に付、戸主となり相続するの非なるを民法上より遺産を相続せざる事を相談せしに、相続を準禁治産として止めるか又は祖父より孫へ売買登記するより仕方なかるべしとの事にて種々話して帰る。

予記 牧〔野〕内武人を訪問す。

【語句の説明】 ①日本工業倶楽部：一九一七年三月、和田豊治、大橋新太郎らの発起で創立された財団法人。創立時の理事長は團琢磨。

②牧野内武人：一八九九～一九七九年。弁護士今村力三郎門下。民権派弁護士として活動し、戦後には日本民主法律家協会の代表理事を務めた。また、社会党の港区総支部長を務めるなど政治活動も行い、労働党や社会党から衆議院選挙に立候補したこともあった。

## 十二月四日 金曜

晴。駿台荘の一夜安眠し、太田耕造氏に電話にて本多熊太郎氏召聘の件を話す依頼せり（講演来峡方）。中込氏に面会を申込みたるに午後三時過來訪せられたしとの事に、午前中用事もなければ先づ前沢清人を訪問し、鶴見総持寺にても参詣せんと志せしに品川鮫洲の寓居を訪問せるに、昨夜次女千栄、物干に上りて縊死せりと云ふ処にて皆取込み居り。清人は親戚に手紙にて報告なし居り、一時間計り話して去る。それから上野松阪屋に行きて店内を見物するに、不景氣にて品物安く、見物人買手雑闇して天下の消費地として盛なるを見る。羽織紐坐布団地等安物二三点買ひて抽籤したるに電気火のし一箇当り、それを携へて名川弁護士事務所の中込弁護士を訪問して下島宇之次郎、中村信八両人の弁護状況及証人喚問状況を問合せ、銀行支払猶予に入りたる事等につきて種々話して帰宿す。天気よろしく無風、都大路常に雑踏を見るも不況は深酷なるもの、如く自動車市内五〇銭以下となる。社会の今日 国際連盟対、日本の陸軍外交の勝気味となる。

【語句の説明】 本多熊太郎：一八七四～一九四八年。昭和期の外交官。スイス公使、ドイツ大使などを歴任。当時は在野にあつて幣原外交を批判した。

十二月五日 土曜

晴。朝八時桜町着、直に大雄寺に鐘樓の建築を見る。立派なる大建築にて和尚に面会し、来る十二日落成式を挙行する由を聞く。それから銀行へ出勤したるに、預金者沈静にて払戻も余り多からず、五十円以下のものも少額なり。それから六ヶ敷き預金者には方法を講しつ、ある由なり。頭取出県し、公金預金県より転貸方奔走中なり。銀行の前途寒心に堪へず。併し予が樂觀説を唱へ居るに付き平野、原、松沢等は無責任なりと云ひ居る由聞く。要するに予は商売人としては余りに不適当なり。依て他に求めるべく決意せり。午後六時帰宅せり。併して家族打揃いて東京より買來りたる土産物等開きて見る。親類皆此經濟的打撃に良き事はなく、皆喘きつ、ある話のみ。\*\*\*然り、\*  
\*両家然り。\*然り。前沢然り。有産階級の没落の日愈々近つき、手に労働の出来るものが新に生活線上に浮上る時機到來せり。

予記 増恵、村田屋伯母病氣見舞行。

発信 太田耕造。本多熊太郎を頼む事。

受信 大平久男。

十二月六日 日曜

晴。組合の事、銀行の事、家事、脳裡に往来すれとも今日一日は休養すべく悠々自適す。午前中、牧内の縁談に付、大平久男の娘を懇望せしに他に所望ありて駄目となりたるに付、其旨手紙にて牧内へ出す。大平久男へは林義雄の娘周旋方依頼せり。母、村田屋本家老婆病氣に付見舞に行く。予は終日家居して父と共に談し、年貢の不足分等催告したりして日を過せは、小春の如き無風晴天にて、静けく庭の散る落葉の音も聞ゆる位なり。木下、梅の枝を持ちて來訪せり。午後、組合

の事心にかゝりて居れば行きて見と志せしも、何となくものうく遂に行かず。夕景に入りて外出し、弁天に天龍川の流を見て、石を川原に拾ひ等して悠々自適せり。毎々の忙しき日を一日の閑を得たるは幸なりし。今村政一來訪し、嫁取に付祝儀に召きに来る。初太郎も同上。  
発信 牧内一。大平久男。前沢清人。  
受信 前沢清人。

十二月七日 月曜

雨。組合の事心にかゝれば、朝支所に行く。凍豆腐組合のもの來りて資金の貸付方依頼あり。組合の難局に面して此の難関を突破するこそ男子の本懐なりと吹く。次に本所に到りて青山専務に面会して最近の情報を聞き、今後の処置等につき打合して午後一時半上飯、銀行に出頭す。頭取に上京の報告。頭取より出県の話あり。明日重役会を開く事等打合せて、放課後村田屋伯母午前二時死亡したるに付見舞に行き、親類相談に列す。倭志雄風邪を押て來り居り。漸く葬儀万般に亘りて準備出來たり。予も之を助けて準備相談なしたり。午後十一時帰宅す。銀行、組合共に危機に瀕し居りて、到る処不況の極致にあり。尚、家の外交もつとむるにて多忙極なし。村田屋葬式は九日午後二時と決し、母は午後帰宅せり。  
組合に凍豆腐屋の諸氏に会ふた時に、百十七B―組合、諸種の悪評があるから注意せよとの話を聞いた。  
予記 組合にも流言蜚語飛ひたりと聞く。

十二月八日 火曜

晴。寒氣去り春先の如き暖さなり。雨後の湿氣心地よろし。中島初

太郎方にて嫁取るとして招かれたるも、村田屋の葬式や銀行の重役会にて、朝の間に立寄りて祝儀を述へて上飯す。銀行には小池氏来りて支払方法に付て研究し、尚県の百十七Bに対する迷惑を一掃すべく種々研究せり。午後重役会を開きて、研究事項及報告事項に付頭取より大体の説明あり。予は山口氏を東京に訪問して其の貸金請求に証書書替の情況に付き話し、山口氏の泣言とを報告せり。猶支払方法に付て研究したるに別に良案もなく、支払は大口と小口とを問はず了解払をなす事としたり。当行が各行へ挨拶して支停の如き処置をとりたるは、大に誤れるやり方なりし。重役会は午後一時より五時に及び、南倉の重役会に付ては予は村田屋より納棺の報をうけて中途にて辞去し立会はず。村田屋にては午後六時納棺をなし、之に立会いたり。関島、小池、竹泉堂等来訪せり。南信新聞池田、住宅資金の寄附金の内、金十円支払ふ。

予記 百十七B―産業組合、相次て種々の評判出て、予の身上に対する攻撃もありしなるべし。  
社会の今日 国際連盟恐るに足らず。

## 十二月九日 水曜

雨。今村政一の祝儀がある。村田屋の葬儀がある。世は様々だ。政一の処を訪問して祝儀を述て、炬燵の上で祝盆をもらつて辞去す。村田屋を訪ふた。午後二時、時間正確に出棺の予定なので万事を用意し、女中共は走つて飯や酒の仕度をして居る。銀行へ出た。小池か来て、頭取と支払方法や県、大蔵省に対する対策やに付研究して居た。予も此財界の難局は如何に推移すべきかと云ふ事を考へた時には益々不安の度を増し、結局革命かと考へるのみである。一時間計り共に研究し

て、公金預金を如何にすべきか、産組預金を如何にすべきか等につき研究し、大蔵省は小池氏之に当る事となる。午後二時出棺して雨の中を葬列か通つた。棺付をした。万事葬儀は順序よく運はれて、午後四時には終了して歸つた。銀行に立寄つて再び小池、大平等と話した。大平には、赤裸々になる覚悟が付けばそれより強くなれ、此際ケボ／＼する様では駄目だと励ました。大平は仕方ないと頭を下けて居た。今日は葬式で殆んど銀行務は脳中へ入らなかつた。

予記 家よりも生花壺対と香料五円を贈つた。先方では初七日として砂糖八〇〇匁を配つた。好日なので嫁入や祝儀が多かつた。晴男三女竹村与平へ嫁し、増恵客に行く。

【語句の説明】ケボ／＼する…うろたえること。ぼんやりすること。  
主に岐阜県、愛知県、滋賀県の方言。

## 十二月十日 木曜

晴。多忙なる日なり。午前中組合支所へ行く。資金として信聯の定期預金八万五千を村長の了解を経て引出すより外なく、村長の了解を電話にて得たり。依て吉川芳太郎を自宅に訪問して、役場の了解を得て最後の貯金を当座に引かへて之を預金支払資金とする事に決し、其の了解及調印方を乞ひたるに、之に調印出来る事となり、再び役場に助役を訪問して青山と共に助役を説きて、定期預金証をもらいて之に代ふるに役員の責任保証の連判状を入れて信聯にて書替する事とせり。次て上飯し銀行に出頭すれば、頭取は不相変処断力を欠き如何ともすべからず。依て種々合議の結果重役行員打て一団となり、更生に邁進する事を声明して以て此局面打開に尽すべしと決したり。村田屋の初七日ありたるも、銀行の用事多忙にて遂に日没後訪問す。それから龍

口莊一の祝儀に招かれ、仙安に出席す。金田煤酌人たり。賑かにて午後十一時開〔解〕散。

十二月十一日 金曜

曇雨。浅間山噴火甚しく、政界も亦動揺し遂に民政党内閣総辞職して閣下に請い、遂に不景氣内閣潰倒す。財政、外交、皆一つとして行づまらざるなく、思想、財政、外交、国難頻々来り。遂に政策も行つまり投出の止むなきに至れり。銀行へ出勤して如何にして百十七Bを更生するかに付頭取を相手に相談したれども、頭取も困難の立場にて殆んどウロが来り、如何ともなし難きか如く、茫然自失せるもの、如し。依て信聯に松沢数一を訪問して彼が申込を問ふべく話したるに、彼曰く、百十七の重役の銀行更生に関する熱意を問ふ旨を質問せられ、頭取の見かけ倒しにて何の力もなかりし事を告白せり。依て重役行員一団となりて更生に邁進する決意を有するを以て、将来陰に陽に援助を乞ふ旨を告げて去る。次に松下来行し、前沢との間の話に経済相談会を開き百十七更生案を立て、は如何と。依て愛泥に会いて其旨を告けたるに、頭取より又取消の話ありたるに付、愛泥に其話は暫く握り置かれる様に話す。南信重役会あり。出席し内閣総辞職の談をなし後継内閣の下馬評をなす。次で愛泥より百十七Bの不評判を聞く。

曰く信濃時事主催にて預金者大会を開く、曰く金田を百十七より葬れ、曰く百十七のグズ／＼を曝露し早く往生せしめよ等の話、記者の問にある由を聞く。

社会の今日 民政党若槻内閣潰ゆ。

【語句の説明】①民政党内閣総辞職：第二次若槻内閣が外交・財政面で苦境に立たされる中、政友会と民政党の連立内閣を組織して挙国

一致体制を敷く協力内閣論が展開され、その是非をめぐって閣内、党内は分裂した。協力内閣論の中心人物である安達謙蔵内務大臣が自説を固持し、単独での辞表提出を拒んだため、同内閣は閣内不統一によって総辞職に至った。

②ウロが来たり：うろたえること、ぼんやりして物事の判断が出来なくなることを、「うろが来る」と表現する。主に近畿地方で多く使われる方言。

十二月十二日 土曜

曇少雨。大雄寺の鐘樓竣工、其の落成式及開山様遷坐式あり出席す。朝銀行に行き頭取宅を訪問して、池田愛泥に会して当行の整理に関する諸説を聞きたる事に付て報告し、尚家事上の都合にて銀行の方は時々欠勤の止むなき旨を告けたるに、頭取弗然色をなし「君の銀行に対する態度誠に無責任なり。若し此際止めると云ふなら予は君と差〔刺〕違へて死すとも辞せず」と云ふ。予へ信賴せらるゝは結構なるも、予は将来永く銀行業を以て終始する決心なし、マア今にして内部より火を出さんとするものに非ず、勤務の充分ならざる点は了とせられたしと結び、大雄寺に行き遷坐式、鐘樓落成式に臨み、和尚の注文により檀徒惣代として祝辞を大声にて読み上げて折詰をもらい帰る。銀行にては預金者其他来行し面接す。代田市郎も来行し信産株の入担貸付金に付て1000円を差入て書替を頼まれたり。猶宮沢彌米売の相談あり。吉富商店へ一一円七〇にて売却の世話をなせり。座光寺に水戸浪士六十六年展覧会ありたるに付其出品する品ありしも取りに來らず。

予記 電話にて湯沢隆三に思想史売却方頼む。鐘樓和尚□□建設。菊

太郎整理の話に庄太郎来り。不納年貢米二十俵を十ヶ年賦とし毎年一俵半を増納する事を定む。

【語句の説明】代田市郎：当時竜丘村長（一九二一～四六年）。村会議員（一九二一～四七年）も兼任。

十二月十三日 日曜

雪。霜深くして寒氣一時に増す。今日迄は却て煖にして結氷もなし。父と朝茶を喫し世間話をするのか習ひとなつて居た。組合へ行つた。年貢米の仕切は一駄に付十二円と決めたので是れを勘定し、尚且専務と低利資金借の形式に付て打合せた。農山漁村低利資金は元来時々借りて組合へ転貸してもらつたものであるが、此の資金を借りてあつたので当組合も支払停止をせずに済んだ。若し之れかなかつたら組合も今頃は資金難に陥りて、遂に支停をして居たであらう。本所へ行つた。組合から出す見返り書に付て種々考究して、雪の降る中を滝沢の葬式に行つた。少し遅れて行つた。途中で飯田の連中に会ふた。滝沢先生も落胆はしたが氣丈夫であつた。面会して御悔を言ふたが氣丈夫で居た。竜門寺和尚から般若心經の講義の草案を借りて一読した。よく出来て居た。併し序文へ少しの加筆をなし訂正も加へた。午後五時帰宅して寒燈の下に心經の丘山和尚の著書草案を撰した。

予記 三石自助か来訪して、滝沢葬式だから香奠を如何と相談があつた。伴につれて電話で三原屋に交渉したか、家族へは及はんとの事で中止した。座光寺小学校に水戸浪士六六年祭があつたか行く事は出来なかつた。出品も出来なかつた。

社会の今日 内閣犬養氏に組閣の命下り出来上る。

十二月十四日 月曜

晴。犬養内閣出現し、今迄の民政内閣の施政方針とは異り天下一般に氣受最も良く、株式、米、錦、皆高し。民政の安達、富田、中野等は政友の久原と聯立内閣を計画し、其計画はづれて久原は組閣中に入らず前者は脱党の止むなきに立至れりとか。之れ西園寺公の憲政の常道の結果、聯立内閣は止めとなりしなるべし。政党の政策国民に一一反影し、政党政事の必要愈々感ぜられたり。併し一方政党の腐敗甚しく、政党を厭ふもの朝野に多し。予も既成政党を呪ふものの一人なりし。朝組合支所に行き、組合より出す見返書の原案を市瀬に封書にて送り、工場を一巡して竜門寺に行き、丘山和尚著の心經講義を返して上飯せり。松沢輝七に伝道講返金催促の手紙出す。正午頃銀行出勤す。東日の青柳来行し面会し、整理案も出す能はず、更正案も示すを得ず、グズ／＼して居る旨を告げたり。此の政変の結果は予期する程ならずとも、底入は明にして将来光明を認むるものなるべしと思ふと告ぐ。予記 重役会あり。頭取は人を集めてツマラン事にても相談するを好む癖あり。吉川、井村来行。夜に入りて協議す。

受信 宮井隆次。

社会の今日 政友内閣人気沸騰諸式高く立会停止。

【語句の説明】①民政の安達、富田、中野：安達謙蔵（第二次若槻内閣内務大臣）、富田幸次郎（党常任顧問）、中野正剛（党総務）。政友会との協力内閣運動が失敗した後、三者は立憲民政党を脱党し、一九三二年一月、安達を総裁とする国民同盟を結党した。

②政友の久原：久原房之助、政友会幹事長。

③立会停止：金輸出禁止の影響で株価が急上昇し、東京・大阪をはじめとする全国の株式取引所が業務規定により取引を停止した。

十二月十五日 火曜

曇。組合から銀行に出勤すべく家を出た。組合支所に行つた。屑物買人が五人計入り込んで来た。金輸出禁止の結果諸物価暴騰し、生糸も屑物も騰貴したので買手が殺倒したのだ。組合で石原に会ふて、組合の借金整理に付て其他内部の組織に付て付近の弱少組合併呑に付て、石原の意見を問合せた。予は当村の繭産額が減すれば其補充は他村に求めるより外ない、若し当村のみとすれば工場は一ヶ所にて足る、と話した。組合員の借財整理は北信の方へ視察に行つて来て始めに其案を立て役員会に計りて十ヶ年計画として実行する等、組合に対する計画を話した。次に青山、江塚に来て又其話と農山漁村低資借入の組合員加判を頼む事に付て話した。午前中は専務と諸事打合の爲過したので、遂に銀行を欠勤する事とした。今日は町村長会があつて百十七銀行の負債の話も出る日であつたが、日没頃迄組合に居た。組合は平和な処だ。銀行とは全く居心地が異なる。資金の要求が沢山出るので之を撃退するので苦痛である。

予記 青山も毎日経済難局に当るので困憊して居た。十七日役員会を開く旨を通知した。父の命により吉川亮夫へ手紙で小学校長を物色してやつた。

社会の今日 立会停止。円為替暴落四九半―四〇弗。

〔欄外〕 政変の結果金再輸出禁止。

【語句の説明】 金再輸出禁止：一九三一年九月二八日にイギリスが金本位制を離脱した後も、第二次若槻内閣の井上準之助蔵相は金本位制維持の方針をとり、日本銀行による金融引き締めとともに投機的ドル買い抑制に努めた。しかし、正貨流出への不安もあり、政友会犬養内閣の高橋是清蔵相は井上の方針を転換、金輸出を事実上禁止

した。

十二月十六日 水曜

雨、山は雪。銀行を休んで今村祐次郎の伴善治嫁取をなし朝より客に行く。近隣組合の者集合して正午膳出てたり。酔いて一度家に帰り、今村与一郎と休憩して再び夕刻嫁入来り出頭す。銀行にては予か休むので頭取も大に八ヶ釜しく云ふ。銀行の用務、組合の用務と家事と、三者双肩に降り重なり多忙を極む。併し本日は休養の日なり。

内閣変りたる結果、諸物価暴騰し経済政策も変更したる爲め、大に景気のみは出て物価も底を入れたる感しあり。民蘇生の息をなす。但し政友会の政策如何にな行くかは疑問なるも、通貨政策に於ても緩和するなるべし。円売弗買にて正貨流出し四億円台となれり。

十二月十七日 木曜

晴。組合本所に役員会を開き、朝八時より出勤す。問題は農山漁村低利資金を如何にして貸付くべきかに付き、凍豆腐組合との資金融通法に付、前者に関しては江塚佐三郎より貸金整理方法として信用貸金の三分の一約八万五千円を以て四分二厘で貸付、五ヶ年計画を以て低資貸替を行ふ事の意見出て、之を研究して之を採用する事とし、来る十九日班長会を開いて其趣旨の徹底を計るべく計画する事とし、始め計画したる形式上の貸付は中止する事とせり。次の問題に付ては、凍豆腐屋に此際多額の金を貸付けるは副業なりと雖も総代会の決議に反する事となり役員責任上面白くなければ、何とか形式を造る事とし、組合自体が販売事業上凍豆腐の製造を委任する事となりて、代田彦一郎を召致して其旨を告げ凍製造請書を呈出せしむる事とし、伊那社問



題に付て組合長会議あり伊那社に向ふて去る。伊那社問題の時、伊那社の対照表に付彼是論したる時、専務予に對して「ソナ監事では仕度かナイ」等の悪罵をなしたり。之れか耳に残りたるも肚裡に止めて伊那社に去る。併して中途木下千之助を呼び出し之と代る。県より杉本、奥原、〔空欄〕、三氏来り左の問題に付論議す。湧川損失を星野にて肩替りしたるは将来之を継続するや。

伊那社の存廢問題。

午後三時銀行出勤。

十二月十八日 金曜

晴曇。朝直に銀行に出勤す。頭取心配して居た、まれず、予か欠勤する時は来いぐと云ふて、傍に居らされは失神せるもの、如し。膽力の大ならざるを遺憾とす。伊那社より午前九時に来れとの事に直に行かんとせしが、銀行用件にて午前十一時伊那社に行く。県より杉本、奥原、安達の三人来伊し予に問ふて曰く、伊那社の湧川に對する未収入金は何れの責任のものなりや、右五万円の内二万円は聯合会積立金より補填して宜敷や。予は之れに對へて曰く、伊那社は内部關係に於ては聯合会（指導、研究調査機關）と出荷事業と分離し居り、會計も確然分離し居れり。故に湧川未収入は出荷事業の組合之を負担するか当然ならん。若し此問題の責任を云々すれば或は恐る背任行為も出するなるべし。故に此問題は県より低利資金でも出して星野との契約を之に戻し、又事業資金三万六千円も同時に県の低資に仰くより外ならん。積立金二万円を取崩して其損害に充てる事も六ヶ敷からんと、先日不出荷組合会の模様を原唯一をして説明せしむ。

併して午後一時、県官は予等の意見を聴きて去る。後に残りて何と

かして聯合会と糸聯との連絡をとる事を話したり。再び銀行出勤。終て龍門寺の御茶会に出席す。心行くはかり茶を喫して市村、丘山和尚と語る。

受信 山本、竹村襄平。

発信 竹村襄平。片桐寿。

〔欄外〕 山本父来行。谷イチの事に付て頼む。

十二月十九日 土曜

晴。沢口庄太郎来て、菊の借金整理に付て猪佐雄の借金を千四百円を六百円迄マケてくれるに付、今の現住家屋を他人に売りたる時後を森本に貸してくれるか否か、又他に宅地を貸してくれるか否かとの相談があつた。此事に付ては他に相談をして置くと話した。銀行へ出勤。頭取の出勤を待つて話した事は伊那支店長の問題で、更生案に付て、あつた。それから正午組合帰つて班長会をした。班長会には負債整理問題として、組合では農山漁村低利資金を持つて居るから之を（八万五千円）を信用貸付の整理に充當したい、就ては信用貸付二十四万の内1/3を此低資に貸替して六月三十日、十月二十日の二回元利払として低利に書替したい、条件は各班単位として信用借のあるものが連帯して借りる事とし、十二月廿五日迄に申込んでもらい度いと、種々相談の結果話した。予か百十七銀行の常務として組合長を兼ねて居る事に付て、青山専務は心よからざるものあるを觀取した。彼は日頃の慢心を發揮して居た。予は經濟難局に際して組合内に動揺のあるのは面白くないと心かけて、青山か何と云ふても、如何にゴー慢振舞ふとも、決して此際の動揺はせない決心であつた。組合の預金は流出の一方であつた。物価は騰貴したか購買力は少しもない。金利の集納

すら覚束ない情況であつた。班長会も無事終了し、組合の方針も付けて帰宅した。

受信 吉川亮夫。

十二月二十日 日曜

晴。電話で金田から、小池寛が東京からやつて来たから直に上飯して下さいと申越て来た。午前十時に上飯して銀行へ行つた。今日は組合へ行つて青山と種々村経済の難局打開に付て打合せたいと思ふて居た時であつたが、遂に銀行へ出た。小池氏を招致して、更生案立案に就て、経費節減に付て打合せた。政友内閣は前内閣に比して必ず債務者に有利な政策をとるからマア此俟で進むかよいとの話であつた。予は頭取からの命によつて経費の節減案と支店廃合案に付内意を持つて居たか、其れだけは彼は賛成したか更生案には不同意であつた。此点は金田も同じであつた。話は時々脱線して、趣味や政事の事にも及んだ。夕刻迄話して、頭取も来り、其心配を緩和した。小池氏の意見は、全国に此の如き銀行は沢山あるからと云ふて樂觀的、無責任的であつた。蕉梧堂に入つて、頭取と小池と予と炬燵に入り夕食を認めて分れた。午後八時帰宅した。飯田財界人は種々の批評を試みた。其の批評を聞く毎に不愉快な事のみであつた。百十七はグズ／＼して居て潰れるとか、頭取も個人財産を隠匿したとか、予か定期を引戻したとかの話もあつた。

予記 組合の経営か此の分ては愈々困難である。銀行の方を止めて専念する事も出来ず、去りとして銀行のみに没頭する事も出来ない。青山は組合長の椅子を窺つて居るか、之れには渡したくない。

受信 吉川亮夫。

〔欄外〕 吉川亮夫に校長問題を進言した。父に代りて。

十二月二十一日 月曜

快晴。寒気が増して凍つた。凍豆腐製造が到る処で始まつた。信也が帰宅するのを心待ちに待つたが帰宅しなかつた。組合へ出かけた。午前中組合に居た。

十九日に信用貸付金二十四万の三分の一、乃ち各組合員の信用借の $\frac{1}{3}$ を42%の低利貸替。貸金整理に付ては組合員が連帯を恐れて一般に希望者は少なかつたが、極力すゝめて借替をさせる様につとめた。其申込時期は廿五日限りとした。一般に不評たと聞いた。預金は十一月初以来より約九万余円減した。貸付は固定した。組合金融、村財政の危機は来た。青山もイヤになつたと口癖の様に言ふて居た。前途果して之れてやつて行く成算はなかつた。併し一日も生きのびんとする努力は講ずる事とした。午後上飯、銀行へ出勤した。川島組合問題に付て福沢勲かや「つ」て来た。之れと面会して交渉した。代田市郎かやつて来て貸付金を返却出来んと云ふて来た。併し千円出せと云ふた。彼は困つて居た。銀行と云ふ商売はイヤな商売だ。やつて見て驚いた。併し今更如何ともし難い。此桎梏から何時逃れるのだろー。

予記 財界のなやみが泌々と身にふりかゝつて来た。次に起るものは政事である。如何に成行であらふか。

社会の今日 錦州征伐決す。正金円売暴落。

十二月二十二日 火曜

曇小雨。組合へ出頭す。糸終了式来る十二月廿五日とす。別に不景気の際、酒肴を給せず茶菓子五錢袋を給して置く事とせり。青山と会

見相談せり。塩沢新九郎来りて貸金の申込ありたるも、此難局を告げて貸付を行はず。午前中組合に居る。午後上飯し銀行出勤せるに、\*  
\*来行し借金整理と山林売却の件相談ありしも、此儘に過すより外致方なからんと告ぐ。野原商業会頭来り定期の払戻を請求ありしも、之を三百円に止む。午後六時より千代田商会に付西上柳にて相談ある筈なりしも、関島来行せず中止となる。百十七預金の売買の広告出て世人は百十七を疑ふもの生するに至りたるやを慮る。家にては喜代、太次郎来り煤掃を行ふ。朝二時間計り手伝したり。父、医師より酒の禁をうけ居りしも遂に之を解禁して、節酒して之を用ふる事とせり。

県会議長、宮沢佐源治民政党より推されて混乱裡に改選あり。宮沢県家政整理如何にすべきか考慮せらる。

予記 吉川に注告す。校長候補者、

一、守田雅三

二、林英

三、三石直人

社会の今日 円売ドル買の始末発表せらる。

【語句の説明】 千代田商会：千代田生命保険の代理店。千代田生命保険は慶應義塾の塾頭、教頭を務めた門野幾之進が一九〇四年に創業した生命保険会社。

十二月二十三日 水曜

晴。小林善治郎死後二千円計りの借金を遺し、菊、之れが整理に苦み屢々来訪。先日も庄太郎来り如何にすべきかに付相談あり、家を猪佐雄の借金にとられ二百円を貰ふに付後継者の話ありたり。それに付後継者は誰なるかと問ひしに、それは秘密なりと。依てそれを聞いて

来れと返す。組合へ出張す。塩沢新九郎来り貸付を請求せられしも断る。手許急にして困ると口実をなす。工区へ出張し八ヶ島鉄針小毫を入れるに付、其の設計書をもらいに行く。初めて工区主幹に面会し、刺を通し来意を話したるに、総工費は打明けず只設計書のみをもらいて帰る（前日飯野又一上飯せしも駄目なり）。福住善治方の前も通り、何か用件あればとて立寄りて話すに、吉沢の件に付話あり。之を如何にして整理すればよろしきやに付私見を聞きたしとの事に、田間イノ・工と共同して仕事をすべしと話せり（此れは徒に予の意中を披見したるもの）。午後二時銀行出勤す。種々用件あり毎日出勤は遅れり。

新聞記事に銀行の財界記事を余りに露骨に百十七支払猶予の時記したるを以て始末書をとられたりと云ふ。

予記 井村氏来行、倉庫の相談あり。田島啓太郎〔啓次郎カ〕より富士絹を歳暮として贈あり。

社会の今日 円売ドル買の結果一、七〇〇〇万円の損公表せられ問題となる。

十二月二十四日 木曜

曇雨。飯田へ行く。朝、木下倭志雄と龍門寺和尚と来訪す。和尚は年末貧窮者を方面委員として救助するに付話あり。木下倭志雄は父之を呼びよせたるものなるべし。銀行出勤十一時なり。依て喬木館事件に付、福住山下の兩人来訪して其負債に付話あり。曰く、三万七千円の借金に付ては養蚕部抵当にあるを以て加判したるなりと。先づ養蚕部をとり後にせられたしと。銀行としては根抵当を主張したり。此点が銀行と吉沢秀雄と異なる処なり。山下、福住より縷々此点に付話を聞

く。怒り又はナダメて遂に話を運ぶも小田原に終る。予は銀行として債権の確保を主張す。放課後、頭取宅を訪問して菓子券二円を持参して久治の祝儀に付祝詞を述べたり。次で隣家金田を訪問して夕食の饗をうけ、敏雄来訪して共に話して九時帰宅。酒を金田方にて饗せられ飲みたるに、腹痛を感じる。庄太郎、菊太郎来訪し後継者の姓名を聞き来れとの事に話し居りたる処へ猪佐雄来り、それは言明出来さるも保証する人なりとの事に、然らば宜敷いと答へたり。

他に菊太郎の屋敷を見付けてやらさるべからず、と話す。

発信 中原。代田千章。

【語句の説明】①方面委員：民間人を主体とする相互扶助組織。地域の一般篤志家が方面委員になり、生活困窮者の相談相手となつて救済指導にあたつた。長野県では一九二三年に設置され、松尾村では州平の父、森本勝太郎が就任した（一九三〇年まで在任）。当時は大崎丘山（一九二五～四六年）、石原茂一（一九三〇～三三年）が務めていた。

②喬木館事件：喬木館は吉沢定次郎により一八九五年に設立された個人製糸工場。一九一四年に松尾村に蚕部を設け、蚕種を製造した。前年に三万九千円の損失を出し、当時は資金難に陥っていた。百十七銀行も融資していたため、この資金回収問題を指すものだと思うれる。

③根抵当：継続的な取引関係において、将来予想される不定額の債権の担保とするためにあらかじめ限度額を定めて設定しておく抵当権のこと。

十二月二十五日 金曜

アン曇小雨。朝、中村亀太郎年貢米入庫、林猶太郎葬式見舞、木下作次郎測量に来る等にて、木下作次郎へ電話にて支障に付明日に延期方を頼みたり。又猶太郎方にて電話を以て断る。組合にては九時より理事会を開き置きたれば、青山に欠席の旨通告等して、午前中種々取紛れたり。林博へは金五十銭封入し猪佐雄に託して香奠を届けたり。又午前十時母と共に徒歩宗九島迄行き上柳法要に列す。大平、尾上等来り会す。法要終了後、寺詣して直に組合に至る。時既に製糸部終了式始まり居りて、之に参加し受賞者に対して祝辞を述べたり。本年よりは金銭の皆勤賞を廃し品物にて反物を与ふる事とせり。一等一五四名には一円三十銭位反物、其他は裙地なり。終りて従業員男子に酒肴を供し、生徒の催せる娛樂会を見る。阿波の鳴門最も優れたり。百華□より子供死亡の通知に接す。多忙の日なり。

十二月二十六日 土曜

晴。銀行を休んで、木下作治を頼んで北河原の四反歩を測量して小耕地整理をした。其設計を見た。田畑雄太郎や丸山幸治も来て立合ふた。併し肝要な井の問題にはふれなかつた。井は上の方より通して居り田畑が潰した形蹟があるので、之を復旧する事を申込むべきである。午前中に終つて銀行へ行く心算であつたが、遂にはづれて終日測量に費へた。木下は正午頃漸くやつて来た。太次郎と太一が立会ふた。太一は国晴へ貸してあつた土地を取り戻して貸したのだ。国晴から又借りしたのだ。

青天の下で測量等して居れば誠にノンキな生活である。一日を此の仕事に費したのはノンビリした心地であつた。井は潰れたのを復旧せ

しむる事を田畑に告げる事及松島藤太郎に埋立の模様を宣告する事が必要件であり、それによつて耕地整理が始まるのだ。木下作治らは夕食をして帰つた。次に現地を見たから田畑へ申込むのだ。

十二月二十七日 日曜

晴曇。信也か東京から帰宅した。中学校も小学校も冬休みとなる。吾等は之から多忙となるのだ。午前中、歳暮贈答品の芋を下男をして作らしめたり。年賀状の書き余りを書いたりして終つた。宮沢弼から使者が来た。之れには幸便であるので山林等最早売る時ではないと申送つた。午後、組合本所と支所へ行つた。支所も本所も本年末の整理は出来なかつた。1/3しか整理するものはない。清水、毛賀等貸付金が山程ある。之を如何にすべきかに付ては充分考慮の余地がある。此山の様な借金を負ふて行くには如何にしたらばよいであらふか。毛賀、清水の破産より他には道があるまい。凍豆腐も此意味からして副業の奨励をして金を貸付けたのだ―が、将来如何にすべきかに付ては殆んど案が立たない。村治もこれから始まり此れに終始するのだ。ア、組合はイヤになつた―等と考へて帰宅した。豆田屋か東北地方の不況の話があつた。林寿人に会ふて妹の話をした。

予記 山本へ央を寒中預りくれとの事に付断る。

発信 山本。牧内。

受信 山本。

【語句の説明】豆田屋…味噌・醤油などを製造していた松尾村の豆田屋醸造のことか。

十二月二十八日 月曜

雨。雷鳴あり。氣候暖にして朝雷鳴あり、之を聞く。組合支所に出席し青山、江塚と相談して役員会を急施開く事とせり。其内容に付ては、毛賀にて区民の相談をなし委員として三石□、平沢徳三、赤羽賀一、丸山三喜等来組して次の要求を青山に容れたりと云ふ。一、組合にて此際配当担保貸付を行れたし（信用貸付、未収入金減額し、将来尚貸付未収入金をなし得べき余地を作る為）、二、貸付金と出資とを差引かれたし、三、出資を此際払戻され度し、等なり。一に付て役員会を開きて相談すべく決し、其相談をなす事とし夜七時より本所に会同して之を議す。予も遅れて参加したるに余り名案も出でず、配当担保はなす事とし、他は毛賀の委員の申出を拒絶する事とせり。午後一時銀行へ出勤す。頭腦散漫にして何もととりとめたる考出ず。徒に心あせりて何の深慮もなし。単に出勤したるのみ。牧内伯父来行して嫁の談をなし林の娘の写真を返付あり。之を大平久治宛返す。何ものも深慮を費す事出来ずして只銀行の前途に付心配するのみ。

予記 組合にては心弱くして他に主張をなす事出来ず。青山等の話をき、て之を調節するのみ。沢口庄太郎、菊太郎来訪して申込に、家を建てる敷地を借り度し。裡の借家を貸してやるから之を覧〔る〕。社会の今日 満洲匪賊討伐の声明書を出す。

【語句の説明】満洲匪賊討伐の声明書…十二月二十七日、日本政府は錦州方面の匪賊討伐を命じる声明を発表し、翌二八日、錦州への進軍が開始された。

十二月二十九日 火曜

雨。信也を連れて北河原耕地整理の場所を見分に行つた。松島宇之

吉に年貢の勘定に来るべく催告した。又彼の宅地の周囲を如何に整理すべきかに付て彼に説明して聞かせた。藤太郎は不在であつた。田畑雄太郎を迎へに信也を派したか不在なので上飯した。途中雄太郎に会ふて井を復旧せられたき旨告げた。彼は古より水は通はない、併して夏水だけ通したと主張した。併し後日実地見分の上でする事となつた。銀行へ出勤した。種々な事に手を出して居て落付いて仕事か出来ないで、終日働いて何事も出来ない。福住や山下か交々、吉沢秀雄差押事件に付其所有土地の半分を入担して解除方依頼ありしも、頑として聞かず。債権確保を声明せり。併し銀行業の如き仕事に飛込みたるは予の不明なりし事を後より悔ゆ。午後七時組合本所に役員会あり、午後八時出席す。議案は毛賀耕地より委員を挙げて組合へ左の事項を申込みたり。一、組合にては此際配分担保貸付をなされ度、二、貸金と出資と差引かれたし、三、未収入も信用貸も個人的に低利に貸替られたし。一の問題に付て主に協議せしに、平均糸量以上のものにして組合の勘定をなすものに限り、一貫目借繭に付金三十銭を貸す事とせり。其他負債整理貯金として貸付より高利の貯金を預る事(事務員巡回)等を話せり。

## 十二月三十日 木曜

晴。一般に気候は暖になり、凍豆腐の真に凍る様な朝は本月初めに二日計りあつたのみだ。霜かうすく来る位のもので結氷も少い。午前中組合へ立寄て上飯した。組合へは未だ青山も出勤せず、書記のみ卓を囲んで話して居た。製糸部配分担保として平均糸量以上のものに対して参十銭宛、沓貫目の借繭に対して貸し出したので、数量の整理も出来た。此の配分担保の貸は最後の貸になる。其の様子を見て後、午

前十時上飯した。午後一時より重役会を開いた。小池氏か東京より来行して、内部関係の自行車の話や決算に付銷却すべき件等につき相談した。重役会に就ても、重役を行員より採用すべき事を予は主張した。原安雄が来行して、其債務と買入来れる債権預金との相殺を話しかけて金田との間で議論したので、之を予は仲裁して帰らしめた。行内も却て多忙であつたが、支払に關しては心配がなかつたので平年の年末に比して余程安心してあつた。未だ一般が百十七Bに對して不安の念は去らなかつたが、併し一時よりは余程平靜に落付いて居た。現金も多くなつた。回収も極力した。

予記 不在中塩沢治雄が来訪。飯田鈴男が歳暮の砂糖を持参した。餅搗をした。糯米は高くなつて台湾モチか廿銭余であつた。米売の話か野原からあつた。米は十三円半より十四、五円迄高騰した。

発信 歳暮として父より青山へ象山額勤儉を贈る。

## 十二月三十一日 金曜

晴。朝、室内の古い雑誌や各所から寄贈の新聞紙、印刷物等を片付けて掃除をすれは、到る処より目を通さる古新聞、雑誌等出て来りて、焼き失る事も出来ず、片隅に片付けて午前中は費へ、正午頃銀行に出勤し、直に菊を持参して頭取に贈る。行内預金の払出は少く貸金の回収のみなるも、不況のたゝり烈しくして利息の収入も予想外に悪し。只政友会の積極政策の為中央の相場暴騰せるのみ。中原来行して、満州事件より曳いて世界の大幅ともなる慮ありと陸軍省方面にては気つかい居る由より、作戦の計画として上海、新(嘉)坡等を攻撃する方法も既に計画し居る由を聞く。午後七時迄銀行に居りて、大沢を原安雄の事件にて呼びよせて彼の財産整理の話をつけた。既に夕刻帰

宅すれは既に家族は夕食を終れり。帰宅すれはマトマリたる仕事も出来ず、炬燵で時間を空費するのみ。宏、夜眠られずとて泣き出し身体弱し。何事も出来ず只ソワ／＼して本年の一年は暮れたり。頭脳愈々悪しく硬化せり。

#### 補遺（前半）

多忙の年であつた。銀行が伊那電の影響と蚕糸の不況とを殃せられて停止の止むを得ざるに立至つた事。中原の選挙で銀行の用件の為に余り手のふれなかつた事。組合も殆んど全部青山専務に一任したので仕事はないけれども、不況の為貸付が固定して少しも動きかたれない。少し預金の曳出に遭遇せは立ち所に支停の止むなきに至る状況である。農山漁村の低資を政府から借りて（約九万五千円）間に合せ、中央会から干繭資金三万円、低資四万円を借入れて、それで資金の間に合せる事とした等、苦しいマカナイをする。一方、種々な宣伝や攻撃的言論をなすもの多く、到底此分てはやり切れなくなる。苦しい年であつた。

近県及東北地方の銀行は殆んど全部支停をやる。人は騒ぐ、思想は悪化する。国民精神作興会も中原を勤労党に民政党から引き貰いたので、北原阿智之助も余り心斜てない。

政変があつて十二月十四日政友会内閣成り、積極政策をとる事となる。物価騰貴、株式市場沸騰せるも、田舎は諸物資農民の手を離れたる後なれば、却て生活に困難なるべし。

家庭では父は病氣となる。さるも殆んど平癒して家政をとりくれるので銀行へ出勤する事も出来たが、銀行から脚を洗はんには少し深入過ぎた感もある。大平も予を頼として居る。切れる事の出来ない様な

破目にある。

氣候、土用前降雨続き米作如何かと思はれたるも、幸秋の出穂よく天氣暖にして、昨年以上の米の増収あり。養蚕は糸価六百円前後の為生繭一貫目二円五十銭内外にて、本村の養蚕業は到底之を以て生活を立てる能はず、産業の方向転換をなすに非んは生計を立てるに由なし。人口六千五百人を支ふるには他に産業を建て替へるの要あり。一大危機なり。

年末に至りて百十七銀行支〔払〕猶予をなしたる為、上下伊那郡大震動を与へたり。銀行は片桐事件、本島事件、支〔払〕猶予等、矢次早に不吉の事のみ沢山出来、奔命につかれたり。大島銀行の破綻は七月初旬に起りたり。

#### 補遺（後半）

〔欄外〕県議戦〔選〕後載

愛国勤労党は八月支部大会を飯田劇場に開いて支部長に中原を推し、県議候補者として同氏を推す事に決議した。中央からは中谷と神永の兩人が来た。それから青年連は中原を推して候補とし、ドコ迄も一戦やる事に決した。予は座光寺、中原の来訪をうけて、選挙をするには少くも三千円位は入用、其の金はどーする積りかと質問したが、寄附金の集まるものでやる、それきりてやつて見ると答へた。然らば其積りてやるより致方なかるべしと。次に度々会合を開いて予に事務長をやれと皆て云ふ。予は受けなかつた。二晩開いたか予は受けなかつた。中原は九月十日頃軍人会の要件で上京してしまつた。予は龍江村長を訪問して、中原の立候補と拳村一致か出来るや否やを龍峽亭で話した。松尾久米、精一の両氏も来り談が進んだ。村長は出来ると思ふ

と答へたので、塩沢芳雄翁を夜遅く訪ねて中原立候補の旨を伝えて其了解を経た。又十六日には、中原の友人をダルマ屋に招いて中原の出陣を祝ふべく話をした。併し予は不在なので関島彦四郎を代人として出して置いた。其席では始めは友人も中原の態度に付疑つて居たが、衆議一決して中原を県議候補として推す事及事務長は吉川鎮司か当る事と決した、と云ふ。予は十五日夜、銀行の用で上京し（吉川亮夫と共に）不在であつた。其不在中に作戦法を決し事務所をタルマ屋に定めて戦宣を布告した。予は十九日帰省し、廿日事務所に出頭した。事務所では予の不在に付て種々憶測し、吉川亮夫との默契あるもの、如く評し不評を買ふた。予は十六日夜、本部を訪問して中谷、天野に面会し、情報を伝えて軍資金の話をしたか、不得要領に終つた。それから長野行の事を伝えて辞去した。其間か不明の点があるので党では益々疑ふた。事務長は吉川と決したが、弁論隊に出陣して事務所て事務をとるものは少なかつた。今村、代田か主となつて當つた。予は夜分だけ顔を出した。軍資金推薦状の發送等には三万九千を發送せねはならず、「をたけび」を利用せんとしたか遂に拒絶せられてマゴ付いた。金を出せと予に迫つた。併し予は左程の大金は出来ないと拒絶した。片桐か予を訪問して、吉川鎮司か事務長となるに付ては君か開いた友人の後援会でやつたので二日間を限り就任したのだ、それで事務長か君に受けてもらはねはならんと懇請せられた。併し予は行務其他多忙であるので出来ないと断然断つた。金五百円を出せと請れたがそんな大金は出せないと断つた。片桐は予に対し、若し君か金も出せず事務長も受けないならば、吉川は一テツの男たから怒りて去るし、中原か気の毒たと云ふた。か、予は選挙費用の尻ヌグイは御免蒙ると断つた。吉野も廿五日の夜同様の事を予に申出た。予は之れも断つた。

選挙の尻ヌグイの如きは誰もやるものではない。予に対する詰責は今村、其他の青年の口からも洩れて来た。予は不快であつた。統制部は不統一であつた。飯田町に於ける廿四日の郡青の立会演告に於ては、抽籤の不公平を以て立会を拒絶し、大なる不覺を取つた。大横町の町内者は推薦状の發送で挙村一致で働き、時々事務所に来て運動費のネダリに来た。予は方針か各自の寄附によるもので、運動は文書と弁論にする外何者もないと告げた。

中谷は怒る。吉川はスネル。

青年は力はなし。如何にすべきかは憂へざるを得なかつた。

候補者は政友、民政共出場しふつてやつと十八、九日頃願出た。政友では吉川（之は推薦候補である。老父のイヤガルのを無理やりに出した。竹村、塩沢新九郎等か先に立つて）、平田を推した。



〔金銭出納録〕

所得決定額 2630

前年 3060

東京市外大森山王草堂 徳富蘇峯

村田太平 三陣宗太郎

赤神良讓

宗像宗吉

中野町上ノ原六七六

満川亀太郎

守武幾太郎

村田太平

組合関係

〔重要記録〕

一、信聯へ保証書出す 百十七銀行か信用組合連合会より借入るべき金約三十万円に対し（預金の形式）、重役連帯して保証する旨を書き、保証書を出す事とせり（予は之に捺印す）。期限昭和六年四月十一日より同十一年四月十日。

一、百十七銀行より安田銀行へ五十万円の借入保証書を差入る（重役が個人名義なり）。村役場を経て農山漁村低利資金九万五千三百円を借り入る。五月十六日仮領収証を出し受取り信聯へ当座に預れ<sup>マ</sup>後十八日定期預金に八万五千円をなす。

一、木下庄太郎の龍門寺布教伝道講保証加判す、金百八十円。

一、丸山利雄組合より配当担保金貳十円の保証をなす、（期限七年六月廿五日）。

一、組合にて中央金庫より（信聯を経て）金三万円借入手形の保証をなす。（青山金三郎もなす）、期限昭和七年二月一日。

一、組合にて農山漁村低利資金九万三千円（計り）を村より借入れ之を信聯へ定期預金となしありしか、資金に窮し之を当座に引直し、村に各役員全部の個人保証連帯証を差入出て村より借入る事とせり。

一、信用組合中央会より組合資金借入のため手形（九十日）四万円に調印せり。

〔住所録等〕

東京府下西巢鴨町宮仲二三八〇 綾川武治

東京府下砧村喜多見成城二三〇 平田晋作

東京市外保谷村上保谷五六五

飯田町

下諏訪町

東京市上野桜木町一七

中津町 熊谷貞雄

山吹村

東京市外西ヶ原農林省農事試験所

東京府下井荻町下荻窪52

竜丘村

東京市外

大連市伏見町十一番地三ノ二

東京市外世田谷町下北沢一〇七〇

松本女子師範学校

東京市赤坂区青山南町六青山会館

倉沢量世

橘清平

山田遂亭

唐木田藤五郎

間孔太郎

丸山良人

大賀義一

山脇正隆

佐々木薫

満川亀太郎

宮井隆次

平田宗平

林英

守武幾太郎

東京丸ノ内日本興業銀行	公森太郎	東京市外渋谷町氷川53	羽生龍郎
宮田村 支店	加納政雄	東京市外池上町石川二三〇	若宮郷之助
上郷村	下平武男	赤穂村	春日義直
伊那社	平沢正美	東京小石川区雑司ヶ谷一如洞主	武田豊四郎
下関市	木下義三	宇都宮第十四師団司令部	秦眞次
東京小石川区原町十二金鶏学院	東方籌	東京市外千駄ヶ谷九〇二	建部遯吾
下高井郡往郷村	大角忠文	朝鮮会寧憲兵分隊	谷川岩吉
横浜市弁天通原合名会社	岡田源吉	東京市外渋谷町松濤五	永田鉄山
東京市外北品川二一二	鈴木鷺山	東京市麹町区大手町一ノ七	古谷敬二
東京府下大森入新井町字不入斗一四七二	星野正三郎	中央教化団体聯合会内	塚本ハマ
東京市外渋谷町桜丘五五	蜷川新	東京麹町区	片桐寿
東京市外大森新宿九九〇	宮崎繁三郎	山吹村	水野常吉
伊賀良村	市瀬繁	文部省	小林治郎作
札幌市南九条西十三	宮沢修二	日新村	両角三郎
名古屋市東区田代町坂上三〇	小林幸治	東京市外渋谷町大向	清水勘一
東京市牛込区市ヶ谷加賀町一ノ九	井篋節三	東京市小石川区音羽町六ノ26	大川周明
東京市小石川区大和町二三	桜井信行方	東京市外上大崎二三一	四王天延孝
東京府下大森山王一八八〇	水野龍介	東京市外世田谷町山崎一四三三	大久保政夫
静岡市鷹匠町三丁目	松田福松	福岡県粕屋郡新宮村下府	原勇三
東京市外杉並町天沼一二七麻布区本村町麻布中学	二宮晋一	東京麹町区富士見町二丁目三十五	鈴木清重
飯田町	小林正幸	朝鮮京城桜井町一丁目一二七―五	高橋泉
東京市外杉並町田端四五	熊谷波治郎	埼玉県浦和町六一五	藤田資蔵
	木下春雄	福岡県粕屋郡新宮村（青森県八戸市小中野町	大久保正夫
	樋口ひし	諏訪中学校	田中行雄

上諏訪湯の脇五九六	館林政治	飯田町 古島喜悦 金田岩男 市瀬明	愛渙堂
神奈川県逗子町逗子二七九	牧内忠雄	東京市外渋谷町大向通	両角三郎
大連埠頭構内 福昌華工株式会社	〃 世田ヶ谷山崎一四三三	京都市西七条日影町	四王天延孝
大連市楠町七八	宮井隆治 大連福	山吹村	福島佐太郎
東京麹町区大手町一ノ七海外移住組合聯合会	部奈恭一	岐阜県益田郡萩原町禪昌寺	山田房三
東京市外和田堀町和泉一三四	石原里巳	東京市外杉並町馬橋二九八	三木東演
年玉 熊谷貞雄柿百粒	新井宇多吉	飯田町下小伝馬町	亀井元嘉
根羽村	片桐一雄 旦開村前田耕作	上伊那郡伊那町	信陽舎
上伊那宮田村	中神米太郎 松下修一郎	宇都宮市溝〔清力〕住町九二	芝原彦十
旦開小学校	北原源三郎	上郷村	横田豊治
飯田町	原森穂	山口県美弥郡秋吉村	北原阿智之助
座光寺	原要	喬木村	村田凱一
喬木村	佐竹達 岩崎篤	市田村	永井宗仁
〃	福島喜男	赤穂村	光沢金一郎
伊賀良村	小飼純一	上諏訪町	福沢泰江
下条村	奥沢俊次郎	東京市本郷区湯島天神町三ノ一	大和又蔵
諏訪郡原村	牛山富雄	下条村	渡辺正三
松本市本町二丁目	原安雄	東京市麹町区丸ノ内東京日日新聞社	川上邦蔵
埴科郡屋代町	久保田栄治郎	龍丘村	吉村広
上郷村	赤羽九市	河野村	伊原宇一
上飯田町	宮下要 久保田源七	東京市外杉並町馬橋三六〇	芦部丑太郎
松本市大名町	関肇	上飯田町五七四	下田文一
上伊那中沢	安藤弥太郎	東京府下駒沢町野沢九二	吉沢幸治
旦開村			菱田氏孝
川路村 中村昇堂 田中一郎			

飯田町	池田医院	池田寿	横滨市中区本町通神栄会社	横田正年
大阪	前沢重雄	泰嶽	東京麹町丸ノ内海上ビル富士アイスクリーム会社	野口鹿児郎
静岡県清水市江尻町法蓮〔雲カ〕寺	仙石美名登	東京市外代々木三〇八〔喪中欠礼〕	東京麹町区内務省社会局分室中央教化団体	古谷敬
長野県屋代町	中谷武世	東京府下杉並町阿佐ヶ谷	東京市外代々木三〇八〔喪中欠礼〕	山本唯次
東京市外井荻町上井草一四五一	米沢佐平治	長野市区裁判所	東京府下杉並町阿佐ヶ谷	西川光二郎
上伊那郡南向村	市岡政香	松本聯隊区司令部	長野市区裁判所	上条利長治
岐阜県中津町	松岡達洲	上田市中之条	松本聯隊区司令部	熊谷伊代吉
市田村	前島隆俊	福島県若松市会津中学校	上田市中之条	田中庄次郎
大鹿村	思沢新八郎	茨城県下妻町裁判所官舎	福島県若松市会津中学校	北原武彦
満草村	荒井勝	長野市山王町	茨城県下妻町裁判所官舎	林章男
三穂村	手塚節次	旅順赤羽町	長野市山王町	荒井勝三郎
東京府下高田町雑司谷九〇九	遠山恭平	東京麹町区麹町二ノ一五	旅順赤羽町	伊藤正美
和田村	加納金三郎	東京市外代々木初台五四〇	東京麹町区麹町二ノ一五	上柳元三
横須賀海軍軍需部	熊谷辰治郎	松本市若町町一六三八	東京市外代々木初台五四〇	関島三郎
東京市外荏原郡大岡山二四	竹村清男	長野市妻科七四二	松本市若町町一六三八	中村五一郎
山本村	菅原兵治	名古屋市東区新出来町二徳源官主	長野市妻科七四二	山際三郎
長野市吉田町押鐘八	村沢直貴	仙台税務監督局	名古屋市東区新出来町二徳源官主	瑞松軒
平岡村	加藤春海	東京市外隠田一三〇	仙台税務監督局	山田滋郎
岐阜市西野町五 松井方	加藤春海	名古屋市外鳴海町	東京市外隠田一三〇	小尾晴敏
市役所勤務	加藤春海	広島県比婆郡高村	名古屋市外鳴海町	中野勘左衛門
岐阜市役所 土木都市計画課	加藤春海〔改頁の上、再度記入〕	静岡県島田町	広島県比婆郡高村	岡村明宗
年賀状差出人名	水野常吉	鹿児島市鷹師町六三	静岡県島田町	虎岩専誠
東京麹町区文部省社会教育官	菅原兵治	大阪府下富田林町毛人町五一三	鹿児島市鷹師町六三	山口敬太郎
長野市吉田町実業教員養成所	菅原兵治		大阪府下富田林町毛人町五一三	林慶吉
				渡辺義一

名古屋市中区徳源寺僧堂	稲垣祖勇	静岡市外安東村	村田契麟
東京市芝区白金今里町八四	原勇三	松本女子師範学校	吉沢俊一
東京府下三河島健国会本部	赤尾敏	静岡県磐田郡大藤村	中村宏
東京市外目黒町中目黒一一八〇	横前智	神戸市六甲八幡組一二	伊東五郎
横浜市中区南仲通り三丁目（湧川社）	和泉正実	横浜市中区本町三丁目	田代竹司
〃 中区北中通り五ノ五七帝蚕ビル	大久保伴次	東京市小石川区関口台町五七	太田耕造
大阪泉北郡高石町高師浜原茂久雄	丸山鶴吉	長野市長門町六六	青野重雄
長野市淀ヶ橋	塩川賢三	長野市上千歳町四九	奥原潔
横浜市神奈川区狛師町四八九	内藤四郎	神戸市会下山町二丁目一六三番屋敷	上柳昇平
下関市貴松町太平山五号地	伊原純二	東京市外三河島町子ノ神七五	野中貞
東京府下高田町旭出六三	河野秀男	東京市外杉並町馬橋五二八	林利治
上田中学校	春日賢一	岐阜県恵那郡大井町二葉	武井治郎
東京本郷東片町一五五	山口英九郎	宮城県涌谷高等女学校	水野治
長野県豊科高等女学校	岩崎忠郎	横浜市中通西戸部町一本松八六三	川口正一
和歌山中学校長	奥源次	基隆市大沙湾	木下光成
浦和町常盤町区一二六九番地	藤井重郎	横浜市鶴見区鶴見町上町一四五八	市岡諒介 <sup>(1)</sup>
長野市妻科一八二ノ三	堀詮	大連市大和町三〇	木下修一
名古屋市白山町	村手彦増	朝鮮龍山漢江通十一陸軍官舎	片野定見
旅順市吉野町八	伊藤正美	東京市神田区宮本町四	野口鹿児郎
横浜市中区本郷二ノ三五	福島新三郎	東京市芝区兼房町二	虎岩卓郎
大連市監部通二〇	松沢万三人	長野市妻科二九一ノ二	木下守
諏訪平野村	前沢知亮	東京市麹町区内幸町一丁目五	平松市蔵
長野市南県町徳永町	太田知度	台北市東門町一〇〇	市瀬齊
長野市大門町五五	宮下友雄	東京駅前丸ノ内ビル内東京満鉄支所内所	田口長援
青森市外陸軍官舎	藤田實三	岡崎市	田口百三

南滿州遼陽第十六師団司令部	德久捨馬	札幌市南四条四十丁目	中島三郎
大坂市住吉公園千歳筋	原茂久雄	東京府下野方町野方駅前	尾沢稻吉
東京麻布区筭町八九	秋山義隆	大阪府下豊能郡豊中町新免	浦野多門治
長野市北石堂町丁二三七	多田勇	長崎県東彼杵郡西大村古町	平部朝也
大阪府泉北郡浜寺町公園前	前沢恒介	大坂府豊能郡池田町	山本勉造
名古屋市中区御器所町 江越十四	石塚正信	大坂市住吉区住吉町八九六	塩沢正二
ゞ ゞ ゞ 小針一八	仲神一郎	大坂市西成正皿池町一	野口収二
愛知県成岩町	北村衡平	東京府下野方町上池袋一五〇	皆川巖
千葉県山武郡東金町上宿	田端岩藏	長野県諏訪郡平野村	陸川薫
長野市南泉町	矢崎賢次	東京赤坂区青山南町六丁目八	唐沢純正
東京府下大井町鯨洲三一	藤沢清人	東京市芝区白猿町二七	吉田初次郎
岐阜県中津町	肥田□郎	市田村	宮島豊治
東京府下中野町桜山十一	皆川巖	川路村	今村善三
東京市外渋谷町桜ヶ丘二六	池田寿	龍丘村	代田市郎
東京市外下荻窪一一九	奥平俊藏	飯田小伝馬町	山岸松次
東京市外千駄ヶ谷五六二	北吟吉	上郷村	原唯一
東京日本橋区江戸橋一ノ六	上野勝啓	上飯田町	杉山真九郎
府下千駄ヶ谷原宿二五〇	菱田為吉	喬木村	市瀬文一郎
東京市小石川区水道端二ノ二一	小松茂治	上田市材木町	田原肆郎
千葉県山武郡蓮沼村	沖村茂一	鉦路市浦見町陸軍宿舍	中田忠義
新潟市東堀通十二	佐藤正男	飯田町	大滝安三郎
東京市麻布区富士見町五三	蓑田胸喜	長野市権堂町	米倉竜也
東京麹町区麹町十丁目十六	竹内賀久治	松本歩兵第五十ノ一	北原武夫
神奈川県逗子町逗子一一七九	牧内忠雄	飯田町	野原弘一
東京市麹町区有楽町二ノ四日本新聞	綾川武治	上荒町	龍口庸太郎
		龍口莊一	

追手町

山田増穂  
唐木太仁作  
古島喜悦  
石川一郎

吾妻町

米山将喜  
代田芳太郎  
蜂谷勲  
馬淵義次  
福田吉郎

(龍翔寺)

矢沢義雄

(税務所)

伊藤正石治郎

横井泰太郎

小林岩金

和地信

伊賀良村

高原英夫

前島貫一

臼田紀六

岡田巳之吉

井村萬之助

井村成次

前沢明文

木下信

掛川良平

今村正郷

田口順一郎

金井仲次

(新町)

林博

宮下滝四郎

鼎村

林雅治

青柳甲子雄

熊谷茂

篠田清信

渡辺一男

矢沢恭一郎

萩元隼人

橋爪和一

林秀男

上飯田町

(トキワ町)

下田史郎

松沢茂雄

守田雅三

川路村  
下久堅村

岩崎貞蔵

藤瀬三士  
橘部明男  
平田史郎

増田文三郎  
松江大元

木下理一

熊谷商三

沢柳桃樹

吉沢秀雄

吉沢武夫

牧野貫二

伊藤伝

熊谷鼎吉

粥川進策

本島愛三郎

武川磯太郎

中島寛一郎

唐沢博

長江洪七

小林岩金

佐々木武人

関島忠次

松野睨一

田中太三郎

中島功

宮脇九八

宮内貢

三石自助

滝沢清顕

佐藤宥治

杉下郁造

横田彦一

北村栄一

原田増次郎

安達章蔵

島岡利雄

市村咸人

太田穰一

肥後種雄

増田仁

清水謹一

藤瀬三士

矢沢有一

千代村	島岡三蔵	萩元健逸	上郷村	松沢数一	吉川三二
平岡村	吉沢白城	吉沢登志		上沼正一	塚原伝治
下条村	奥村清顕	新井岩雄		北原一郎	
大下条村	熊谷重雄			福沢赤山翁	
竜丘村	小林八十吉			伊原五郎兵衛	
三穂村	吉野福一		赤穂村	宮沢要二郎	吉村藤雄
竜丘村	上松彦太郎	代田千代男		福沢二郎	前沢等
大島村	木下小麟	木下卓斉		新井好吉	飯田飾男
山吹	倉田正	平沢忠次		米山彦四郎	福沢憲和
市田	倉田又一	坂巻勇	伊那町	福沢勲	北原衛門
	三沢三郎	酒井安		樋口準平	宮原常広
川路村	小島長四郎		長野	菅沼喜平	野溝準治
(以下の6名はページの上欄外に書かれている)	長谷部耕一		伊那富村	栗林雅一	
上原幸平				垣内芳治	
幾島虎太郎				吉江章雄	
古川寿穂			南向村	佐々木浩一	
松沢大治			飯島	上山東一	
沢柳彦雄			宮田村	平沢源蔵	
関島茂			高遠町	林源	
			中箕輪	小原真一郎	
河野村	武田金造	筒井金太郎	飯島村	織田一郎	
	竹村太郎	毛涯美利	長藤村	北原直衛	
	松尾虎四郎	大原正治	飯田入舟町	松島勲	
神稲	(牧原一男)	平沢万太郎	南向村	小木曾俊	
大鹿村			横浜市青木町字沢渡谷一六〇二		



東京 安田銀行

東京市麹町区丸内三ノ四

秀島喬一

園部潜

産業組合中央会

加藤正美